法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-21

関東大震災以後の季語と表象の変遷 ： 「震災忌」を中心に

安里, 恒佑 / ASATO, Kousuke

(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
62
(発行年 / Year)
2018-03-24
(学位授与年月日 / Date of Granted)
2018-03-24
(学位名 / Degree Name)
修士(国際文化)
(学位授与機関 / Degree Grantor)
法政大学 (Hosei University)

修士論文

指導教授　川村湊　教授

論文題名

関東大震災以後の季語と表象の変遷　―「震災忌」を中心に―

国際文化研究科
国際文化専攻修士課程
氏名　安里恒佑

論文要旨

国際文化研究科国際文化専攻修士課程
安里恒佑

一九二三年（大正十二年）九月一日に関東大震災が発生した。俳人の高浜虚子は、関東大震災に際して、二つの記述を残している。一つは、震災を体験し、震災を俳句で詠むことの難しさを述べたものである。もう一つは、震災以降に、歳時記に新たな季語が多く採用され、近代における季語のパラダイムとなっているという記述である。こうした関東大震災以降の季語の状況において、九月一日が「震災忌」として、歳時記に採用された。これ以降、「敗戦忌」、「広島忌」、「長崎忌」、「沖縄忌」、「福島忌」と、戦災や震災の度に、多くの死を弔う季語として系譜的に産出されている。

本研究では、その系譜の最も古い例として記述される「震災忌」の成立と表象を、関東大震災以降の歳時記の変遷を辿りながら考察することで、近代における季語の枠組みとそれを巡る言説を検討することができるだろう。また、目的とする「震災忌」の考察の末に、現在まで産出される「忌」についても、観点を得ることが出来れば幸いである。

一章では、虚子の記述を検討するために、季語の誕生の経緯、歳時記の歴史をまとめた。また、それにともなって季語の機能や歳時記に掲載される季語の承認といった観点にも着目した。俳諧史／俳句史は、正岡子規の俳句革新のパラダイムによって記述されることが多いが、季語や歳時記の歴史においては、高浜虚子の功績が記述されることが多かった。

二章では、一章の季語や歳時記の歴史を念頭に、近代の歳時記に焦点を当てた先行研究を検討した。当時、虚子の記述通り、多くの歳時記が出版されていたが、先行研究においては、虚子の編集した歳時記を考察の中心とするものが専らであり、中でも一九四〇年に虚子が一人で編集した『新歳時記』が「近代季語の枠組み」の主柱となるものに位置付けられていた。『新歳時記』に掲載される季語は、虚子の裁量によって承認されるか否かが決まっており、それは虚子の俳句の方法と膠着していた。虚子の俳句の方法とは、本来、「写生」のリアリズムと衝突する季語の「歴史的連想」が、衝突するのではなく、一句のディティールに普遍性を与えるというものであった。

三章では、先行研究を受けて、関東大震災以降の歳時記から「震災忌」の例句を拾い集め、その表象を考察した。考察の中で、「震災忌」のもつコード的働き、或いは本意が変遷を遂げていたことを明らかにした。そして、その変遷の末に、「震災忌」は文人や虚子が被災後に語った「歴史的連想」を得るに至った。虚子の方法と膠着した「近代季語の枠組み」において、「震災忌」は季語の承認を得てもおかしくない

ものであったが、虚子の裁量によって「近代季語の枠組み」からは外されるものとなった。虚子の意図的な排除の背景として、先んじて「震災忌」の「歴史的連想」を「地震そのもの」ではないものとして唾棄していたことが挙げられる。虚子は体験した「地震そのもの」を表象不可能なものとして念頭において、「震災忌」を「近代季語の枠組み」から外したのであった。

ただ、この位置付けにより、「近代季語の枠組み」は大いなる矛盾を孕むこととなった。巨大な「歴史的連想」の体系である「近代季語の枠組み」は、その在り方を肯定できなくなってしまった。「近代季語の枠組み」自体が、リアリズムの側から「そのものでない」ものの体系となってしまう矛盾を内包してしまっていた。

ただ、「近代季語の枠組み」から外されてしまった「震災忌」は、虚子が自ら選を行う雑誌『ホトトギス』の雑詠欄にて、多く採られていた。「震災忌」は、「近代季語の枠組み」の外側で、表象不可能性を孕みながら、どのように虚子によって企図されたかというと、関東大震災以降を生きる者が、現在の生活を詠むものとして試みられていた。「詠む」ことを通して、「弔い」や「喪」を行うべき季語として考えられていたのであった。これは、「震災忌」が掲載される初期の歳時記においても見られる傾向であった。

では、「詠む」ことで「弔う」こととは、どのような意味をもつのか。このような問を検討するために、「弔い」の在り方を芭蕉の『おくのほそ道』における旅に見た。「詠む」ことによって、故人を想起し、記憶し、死者を歓待し、それがそのまま死者への贈与となるような、「弔いの場」を出現させる契機として「忌」が試みられていた。

関東大震災以降、産出されてきた多くの死を弔う季語において、多くの死者を追悼することが行われてきたが、そうした系譜の「震災忌」においては、あくまで個人的な「詠む」行為にすぎなかった。あくまで、個人的な「喪」や「弔い」を試みるものであった。

関東大震災以後の季語と表象の変遷　―「震災忌」を中心に―

はじめに　研究の目的と方法……四
一章　季語と歳時記の歴史、発達……七
一章一節　季語の歴史と機能……一一
一章二節　歳時記の歴史と季語としての承認……一六
二章　「近代季語の枠組み」と虚子の方法……一九
二章一節　先行研究における虚子編『新歳時記』の評価……二二
二章二節　「近代季語の枠組み」について……二五
二章三節　虚子の季語に対する方法論……三一
三章　「近代季語の枠組み」から外された「震災忌」……三八
三章一節　関東大震災以降の歳時記……三九
三章二節　「震災忌」は如何に詠まれたか……四二
三章三節　虚子は「近代季語の枠組み」から何を外したか……五〇
三章四節　詠むことで弔うこと……五二
おわりに……五七
参考文献……五九

はじめに　研究の目的と方法

本研究の目的を説明するために、一九二三年（大正十二年）九月一日に起こった関東大震災について、高浜虚子の記述を二つ参照したい。まず、歳時記についての記述である。

> 私たちが俳句を作り初めた頃には曲亭馬琴の拵らえた歳時記が一つあったばかりであって、その他にはそういう種類の書物はなかった。…（略）…またその頃の俳書堂主人の籾山梓月君の発意から中谷無涯氏に嘱して『新修歳時記』一冊が発行された。これは最も厳密な選択になった書物であって、私たちの座右に備えておいて日夕の参考とするのに最も便利な書物であったが、大震災の時にその紙型が焼失してしまって重版することの出来ないのは残念なことである。しかしながらこの『新修歳時記』も主として人事、殊に宗教上の儀式に関する事は旧暦によっている。東京在住者にとってはそれらの行事は悉く新暦にひき直して行われて居るので夏の季題が春になったり秋の季題が夏になったりして居ることなどがたくさんあって頗るまぎらわしい。…（略）…大震災以後になって種々の歳時記が出版されて、それらの書物は争って新題を取り入れて居るようである。私は詳しくそれらの書物を見ないからここに何ともいうことは出来ない。（昭和五年十二月）一

明治五年に布告された太陰暦から太陽暦への暦の変更は、一八七二年（明治五年）十二月三日を明治六年一月一日とすることで行われた。その変動に伴って、それまで太陰暦を基盤としていた歳時記は、すべて太陽暦に引き直されることとなり、新しく季語をどのように分類すべきかという問題を立ち上げた。そうした問題が曖昧なまま、関東大震災においては、既存の歳時記の紙型が消失し、それを契機として新たな季語が採りいれられはじめたことを虚子は記す。

もう一つの虚子の記述とは、彼が被災した翌月に『ホトトギス』に寄せた震災を詠むことについての感慨を述べる文章である。虚子は、知人の葬儀のため帰っていた鎌倉で「被災」し、津波の被害や隣家の嫁の圧死を見ている二。

一 高浜虚子「歳時記」『俳談』岩波文庫、一九九七年、六十一―六十二頁。

二 高浜虚子「たけしが来るまで」『ホトトギス』ほととぎす発行所、一九二九年十一月、一―十四頁。高木晴子・上野章子・大岡信・川崎展宏「座談会　父・虚子、俳人・虚子を語る」『国文学　解釈と教材の研究』學燈社、一九九一年、九―十頁。

この間ちょっと京都へ行った時、新聞記者が尋ねて来て、千載一遇の大地震にお遭いでして、定めて名句が出来ましたろう。と言った時、私は変な感じがした。今まで俳句を考えたこともなかったが、改めて考えて見てもどうも俳句になりそうに思えなかつた。…（略）…彼の蕪村に

おろし置く笈になゐふる夏野かな

といふ句がある。この句は地震を詠んではいるが、趣は夏野にある。夏野の広大なことをあらわす点に興味がある。恐らく地震も余り大きい地震ではあるまい。…（略）…

がしかし、この間であったようなあの破壊力の強い地震、あんな地震になると短い俳句で何が描かれよう、何が歌えよう、全く殺風景という一語に尽きるように思う[三]

虚子のふたつの記述に拠れば、関東大震災は、歳時記に新しい季語が多く取り入れられ、また、震災に対する表象の困難さを体験する契機となった。

ここで留意しておきたいことは、虚子の体験した表象不可能性は、単に定型の短さゆえに起因するのではないということだ。仁平勝は、虚子の俳句の方法として、正岡子規の主張であった写生主義を受けた客観写生と堆積された古歌を連想させる「歴史的連想」をもつ季題とが、本来は矛盾することを指摘している。それは、先だって江藤淳も、柄谷行人も指摘している。仁平は、こうした指摘を踏まえ、虚子の俳句の方法が、「歴史的連想」の働きから写生を普遍的なものとしていると考察する[四]。虚子の述べる表象の困難さは、写生へ普遍性を付与する季語の「歴史的連想」が働かないという点にあるだろう。正しく「殺風景」という一言に尽きるのである。

対立するはずの写生と季語とが普遍的な働きを創出する方法が関東大震災に際して表象の困難さを体験し、その一方で新たな季語が多く歳時記に取り入れられた。それは、江戸的なものが消失し、新たに都市が建設される「風景」の変化とも関連しているだろう。新題の増加のなかで、関東大震災の発生した九月一日が「震災忌」と称され、季語として生成された。元来あった「芭蕉忌」や「子規忌」などの古人を弔

三　高浜虚子「消息」『ホトトギス』ほととぎす発行所、一九二九年十一月、七四―七六頁。
四　仁平勝『虚子の読み方』沖積舎、二〇一〇年。

う忌日の季語ではない、多くの死を弔う季語として産出された[五]。こうした季語の生成は、ポツダム宣言を受諾し日本における第二次世界大戦の終戦が玉音放送にて告げられた八月十五日を「敗戦忌」、広島市に原子爆弾が投下された八月六日を「広島忌」、長崎市に原子爆弾が投下された八月九日を「長崎忌」、司令官である牛島満によって実質的な「沖縄戦」の終結した日とされる六月二十三日を「沖縄忌」、東日本大震災の発生した三月十一日を「福島忌」とするように、現代にいたるまで戦災や震災の度に系譜として産出されてきた。これらは発生と表象において、個別に検討されるべきであろう。

本研究は、その系譜の最も古い例として記述される「震災忌」の成立と表象を、関東大震災以降の歳時記の変遷を辿りながら考察することで、近代における季語の枠組みとそれを巡る言説を検討することができるだろう。また、「震災忌」の検討の末に、産出される「忌」についても明らかにしたい。

一章では、虚子の記述を検討するために、季語の誕生の経緯、歳時記の歴史をまとめる。また、それにともなって季語の機能や歳時記に掲載される季語の承認といった観点にも着目する。俳諧史／俳句史は、正岡子規の俳句革新のパラダイムによって記述されることが多いが、季語や歳時記の歴史の場合はどのようなものになるのかも論の俎上にあげたい。

二章では、近代の歳時記に焦点を当てた先行研究を検討する。前述すれば、先行研究の述べる「近代季語の枠組み」は、虚子を主柱とするものであり、こうした枠組みと虚子の俳句の方法がどのような関係にあるのかを考察する。

三章では、先行研究の「近代季語の枠組み」を受けて、関東大震災以降の歳時記から「震災忌」の例句を拾い集め、その表象を考察する。そのうえで、虚子が「近代季語の枠組み」から「震災忌」を外したのか、また、「震災忌」を如何に企図していたのかを検討する。さらに、こうした検討から、「忌」をめぐる所作としての「詠む」ことで「弔う」ことを考察する。このような問を検討するために、「弔い」の在り方を芭蕉の『おくのほそ道』における旅に見る。そして、今一度「震災忌」の表象に立ち戻ることで、産出される「忌」の在り方に迫る。

五 角川学芸出版 編『第四版 合本俳句歳時記』二〇一一年、三省堂 編『ホトトギス俳句季題便覧』二〇〇一年、学研 編『現代俳句歳時記』二〇〇四年といった現代の歳時記にも、「震災忌」の項があり、作例に中村草田男「万巻の書のひそかなり震災忌」、松村蒼石「震災忌大鉄橋を波洗ふ」などがある。

本章では、虚子の証言に見られた関東大震災以降における新たな季語の積極的な採用による歳時記の変容、また、関東大震災を巡る表象不可能性の考察を行うための下準備として、歳時記と季語の歴史的変遷や発達を、先行研究をもとに纏めておく。

そのような歴史的な纏めを行うにあたって、本論では、村山古郷による『現代俳句大辞典』における「季語」の項目、筑紫磐井の『季語は生きている　―季題・季語の研究と戦略―』、堀切実の『増補　俳諧歳時記栞草』における「解説」を、歳時記に関する体系的な研究の主だったものとして挙げる。ただし、これらの先行研究の記載には、相互に初出の違いが見られたので、それらは原典に当たって補った。

歳時記や季語の歴史を纏めるための前提として、「俳諧史／俳句史における近代がどのようなパラダイムにおいて捉えられているのか」、という点を明らかにしておかねばならない。それというのも、一般的な認識とは異なり、「俳諧史／俳句史における近代」と「季語における近代」とはイコールで結ばれるものではないからである。

俳諧史／俳句史における近代が、どのようなパラダイムによって捉えられているのかといえば、正岡子規の俳句革新が、転換点として挙げられる。つまり、それを契機として俳諧と俳句とが、名称において分別されるだけでなく、その方法においても大きな断絶があると考えられるようになったのである。

俳諧と俳句の方法の違いとして、「写生」の導入を挙げることが出来る。これは、坪内逍遥が『小説神髄』において「小説は芸術である。しかし芸術であるためには、小説は写実的でなければならない。」と述べたような、芸術の自律的価値を求めんとするリアリズム[六]の一環であったと言える。俳諧と俳句とは、「写生」というリアリズムの思想と方法によって深く断絶されているように捉えられている。

子規が俳句革新を成し得た要因として、あらきみほは、「俳句分類」、「写生の啓発」、「師表としての蕪村」、「同郷の俳句仲間」、「新聞「日本」」の五つがうまく合致していたことによって可能であったと述べる[七]。ここで留意しておきたいのは、俳諧が完全に唾棄され、俳句において「写生」の方法が樹立された、ということではないということだ。

あらきが挙げているように、子規は明治三十二年に『俳人蕪村』を発刊し、「写生」という観点から蕪村の読み直しを行っている。そうした読み直しを通して、俳諧において俳聖と位置づけられていた芭蕉よりも、子規自身が新しく評価した蕪村を高く位置づけ、俳諧の再読を通

六　中村光夫『日本の近代小説』岩波新書、一九五四年、三九頁。
七　あらきみほ『図説・俳句』日東書院、二〇一一年、四七頁。

して「写生」の啓発を行うことに成功したのであった。子規の蕪村を評価する方法は、時を経て、萩原朔太郎の「俳句は抒情詩か？[八]」によって、改めて行われ、俳句の本質論を述べる手段として踏襲されている。

また、子規の「写生」という観点からの蕪村評価は、芭蕉の位置づけを変えながら、当時の俳壇形成においても用いられた。『俳人蕪村』における芭蕉と蕪村を並置する語り口は、明治三十年一月二日から三月二十一日までの新聞「日本」及び「日本付録週報」に連載された「明治二十九年の俳壇」において垣間見ることが出来る。

二十九年中に製作せられたる俳句が一般に前年に比して進歩したるは著き事実なり。併しそは新聞雑誌等に載せられたる俳句を通覧して知るべきものにして、単に程度の上に於ける進歩は二三の例句を以て証し得べきに非ず。然れども俳句の意匠(言語は後に言わん)の種類の変化は一二句を挙げて猶お且つ其の相違を見るべし。例えば

古池や蛙飛び込む水の音　芭蕉

柳散り清水涸れ石ところ〴〵　蕪村

の二句を比較して両俳家両時代の観念の如何に変化せしかを知るべく

蚊帳ごしに鬼を笞うつ今朝の秋　蕪村

元日や鬼ひしぐ手も膝の上　梅室

の二句を比較して両俳家両時代の理想の相違如何に甚だしきかを知るべし。蕪村の柳散の句の如き材料多く印象明なる者はたまたま芭蕉が作らざりしに非ずして芭蕉時代には未だ此種の工夫を為し得ざりしなり。芭蕉は此の如き句を嫌いて作らざりしにも非るべけれど蕪村の句が含みたる趣味を解し得ざりしなるべし。蕪村は梅室の前に出でたりといえども梅室の元日の句の如き俗趣が俗世間の喝采を博するに足ることは知りたるべく、知りて為さざりしは以て蕪村の意向を窺うに足るべし。昨年の俳句が稍蕪村流に傾きたるは一変化として見るべしといえども古人が既に変化し得たる範囲内に於ての変化は俳人各個の上にこそ著き変化ともなれ俳諧史の上より見て只古の変化を繰り返すに過ぎざるなり。而して吾人は又昨年の俳句界に於て今迄曾て有らざるの変化ありしことを認むる者なり。是れ大に研究すべきの現象にあらずや[九]

八　萩原朔太郎「俳句は抒情詩か？」『四季』四季社、一九三九年九月号。

九　正岡子規「明治二十九年の俳句界」『子規全集 第四巻』講談社、一九七六年、五〇一―五〇二頁。

子規が「明治二十九年の俳壇」において目的とするのは、当時の日本派の作品を提示し、評価することであった。こうした目的において、あらきみほの指摘通り、子規は「写生」と一体となった蕪村を師表としながら、時代の特徴を刷新し得た者として、虚子と碧梧桐、その他の日本派の俳人に評価を施している。また、このような評価の仕方は、蕪村よりも劣位に置いた芭蕉を相対的に評価の基準とした上で、芭蕉を高位としていた俳諧という制度を、作品をもって刷新する者たちとして、日本派の俳人たちを位置づけることとなった。

碧梧桐の特色とすべき処は極めて印象の明瞭なる句を作るに在り。印象明瞭とは其句を誦する者をして眼前に実物実景を観るが如く感ぜしむるを謂う。故に其人を感ぜしむる処恰も写生的開所絵書の小幅を見ると略々同じ。同じく十七八字の俳句なり而して特に其印象をして明瞭ならしめんとせば其詠ずる事物は純客観にして且つ客観中小景を択ばざるべからず。例

赤い椿白い椿と落ちにけり　碧梧桐

乳あらはに女房の單衣襟淺き　同一〇

虚子が成したる特色の一として見るべきは此外に人事を詠じたる事なり。俳句は元と簡単なる思想を現すべく随って天然を詠ずるに適さるを以て元禄に在りて既に此傾向の甚だしきを見る。昭和安永に至り蕪村は別に一機軸を出だし俳句の趣向として天然を取ると共に人事を取りしかも其点に成功するを得たり。虚子の成したるは特に蕪村よりも一歩を進めたるなり。一歩を進むとは蕪村が為さざりし所を為したるの謂にして主として趣向の複雑なるをいう。前に挙げたる時間的の句も亦此に属すべき者多し。(句調はここに言わず)一一

こうした「写生」の評価を前提にして、碧梧桐を「空間」的な作家、虚子を「時間」的、「人事」的作家として位置づけた。これらリアリズムの問題については、季語を如何に詠むかという方法論上の問題に留まらず、虚子における表象不可能性の記述を考察するための重要な観点であるため、次章において改めて詳細に検討することとしたい。ひとまず、ここでは俳句史における近代とは、子規の俳句革新における「写生」というリアリズムの方法、或いは思想を介して、捉えられてきたことを確認したい。

一〇 前掲「明治二十九年の俳句界」、五〇三頁。
一一 前掲「明治二十九年の俳句界」、五二四―五二五頁。

では、これに対して、季語における近代のパラダイムとは、どのようなものなのか。結論から述べてしまえば、虚子による歳時記の編集である。

俳句革新運動を行いながらも、季寄せや歳時記は遺さなかったとされる正岡子規の没後から、高浜虚子は『袖珍俳句季寄せ』を初めとする、いくつかの俳句の季寄せや歳時記の編集に携わった。彼の俳句観、季題観が俳壇に与えた影響の深さは、この事実から十分察せられる[二二]

俳句革新を行った子規は、「写生」にこそ手腕を振るったが、季語に対しては殆ど触れることはなかったとされる。季語を巡る近代のパラダイムは、専ら虚子が如何に歳時記と関わり、その枠組みを作り上げたのかという問題と密接につながっている。以下では、こうした「季語の近代」のありようを念頭において、季語と歳時記の歴史、またそれらの機能について纏めておく。

二二 福井咲久良「高浜虚子編『新歳時記』の三種版」『三田國文』五十号、慶応義塾大学国文学研究室、二〇〇九年十二月、一頁。

一章一節　季語の歴史と機能

季語の歴史を遡る前に、「季語」という用語がいつごろから使用され始めたのかを念頭に置いておきたい。前述した俳句革新において、子規は「季語」という用語を用いるのではなく、「四季の題目」という用語を用いている。「季語」という用語が普及するのは、その後になってからであるということだ。

「季語」という用語は、大須賀乙二が俳句雑誌『アカネ』明治四十一年十二月号の句評に用いたのが、その初出であり、その後に一般に膾炙されたことが指摘されている[一三]。また、虚子が好んで使う「季題」という用語もあるが、もとはと言えば、これは明治三十六年に入ってから、秋声会の森無黄によって積極的に使われ出したものであった。

「季語」と「季題」とは、しだいに微妙な使い分けがなされ、後年になって、前者を季節をあらわす詞、季節の詩語であることを指し、後者を題詠の際に課せられる季節に関する題目であることを指すようになったが、使用され始めた当時は殆ど差異が無かった[一四]。

「季語」或いは「季題」という用語が使用され始めたのは、近代においてであるが、勿論、それ以前にも「季語」という概念が無かったわけではない。

日本の歳時体系も、右のような中国の歳時体系の影響を大いに受けて成立した。「恋」と並んで「季節感」は、日本文学の中核をなすテーマであるが、古代の記紀歌謡などには自然そのものを対象とした歌は意外に少ないのである。『万葉集』の主流も「相聞」「挽歌」であり、自然詠の歌は中心的位置を占めない。それが王朝期の和歌の世界になると、中国漢詩文の受容が盛んになったことから、歳時記的な自然観が発生し、やがて歌合の盛行とともに、当座の即興意識が尊ばれ、「恋」とともに「当季」を詠むことが原則となってゆく。そして、中世の連歌では「四季の詞」がいっそう重視され、これをついだ近世の俳諧では、とくに発句の独立化を契機として、季題・季語意識が浸透してゆき、そこに本格的季寄や歳時記を生む基盤が成立してくるのであった。わが国における季節感や歳時感覚は、決して自

一三　村山古郷「季語」『現代俳句大辞典』明治書院、一九八〇年、一三八―一三九頁。筑紫磐井『季語は生きている　―季題・季語の研究と戦略―』実業公報社、二一〇七年、八頁。前者の示した『アカネ』の初出が誤りであったため、後者に依拠した。

一四　堀切実「解説」『増補　俳諧歳時記栞草（下）』岩波文庫、二〇〇〇年、五四七―五四九頁。

然発生的に生まれてきたものではなく、歌合や連歌など、集団制作の場などにおいて、制度として発生してきたものだといえよう[一五]

近代から長らく遡ると、近世初期に、「季語」を「四季の詞」としていたことが見て取れる。正保二年に刊行されたとされる松江重頼編の俳論書の『毛吹草』には、「連歌四季之詞」に対して「俳諧四季之詞」が用いられている。これらの違いは次のように言い表すことが出来る。前者は「竪題」と呼ばれ、連歌から引き継がれた「雪」、「月」、「花」などを指すのに対して、後者は「横題」と呼ばれ、俳諧から取り入れた「ゑびす講」、「踊り」、「煤払」などを指す。子規が用いていた「四季の題目」という用語は、『毛吹草』に見られる用語を少なからず踏襲しており、やはり先述の通り俳諧史／俳句史におけるパラダイムと季語におけるパラダイムがぴったりと重なるわけではないことが分かる。

さて、ここまで「季語」という用語を巡る変遷を遡った。ここからは、季語の誕生と機能とについて、纏めておきたい。季語の機能について、端的に述べるならば、一般に季語とは自然の季節感や季節の行事などの幅広い内容を持つものであるが、特に季節にかかわる微妙な人間感情を表出する点にその特徴がある。

前述の引用で触れたが、季語の機能に関しては、宮坂静生もその起源について言及している。宮坂は、季語を、ただ季節の風物を指す言葉ではなく、実際の風景に触発されながら、より「美しい」イメージへと練り上げられた想像の結晶であり、平安貴族が想定した共通の規範に基づく「共同幻想」として成立したと規定する[一六]。ハルオ・シラネも、読みについて高度に発達した文化的・文学的なコード（約束事）であり、連歌連句から発生した共同体のコンテクストと作用しあう働きをもつと、その機能について考察している[一七]。こうした文化的・文学的コードとは、連歌以来「本意」と呼ばれているものである。

俳諧では同義で「本情」ともいう。本意説は古くは歌合の判詞などに見られるが、連俳に至って作法上特別留意されるようになった。連歌書では紹巴の『至宝抄』が本意を説いて最も詳細である。本意に「恋の本意」、「富士の本意」などもあるが、ここではとくに季語について説かれる面が多い。例えば「たとひ春を大風吹、大雨降れども、雨も風も物しづかな事に仕候事に候。」とあり、連歌において春雨春風は本来の在り方として物しずかに詠むべき事が肝要とされている。季語における本質規定である。季吟の『山の井』は江戸初期の

一五　前掲「解説」五四九頁。
一六　宮坂静生『季語の誕生』岩波新書、二〇〇九年。
一七　ハルオ・シラネ著、衣笠正晃訳『芭蕉の記憶　文化の記憶』角川叢書、二〇〇一年。

季寄せであるが、季語のそれぞれに詳しい解説がほどこされている。これも本意説と心得てよく、現時歳時記に相当する作者のための応用書であった。『去来抄』の中で去来が「寺の秋」が「さびしき」ものという本意の普遍性をとって動じない姿勢も見られるが、季について説かれることが多くなれば、いきおい現代でいう季題趣味による詩情の固定化をさそうが、本意成立の歴史的意味も一面では考えてみる要がある[一八]

本意は、「写生」においても見られるが、俳諧以来の方法である「取合せ」という方法において、とりわけわかりやすく見ることが出来る。野林正路の『詩・川柳・俳句のテクスト分析　語彙を図式で読み解く』は、芭蕉の発句のテクスト構成を「語彙の図式」に基づいて読み解いた上で、六つの類型に分けている。野林の提示した図式の基底には、俳句が類語関係の単語二つを「取合せ」ることによって、作品の世界を構成しているという前提の知識がある。

初しぐれ猿も小蓑をほしげ也
五月雨をあつめて早し最上川
石山の石より白し秋の風
荒海や佐渡によこたふ天の川[一九]

このような「取合せ」という方法を、より具体的な形で見るためには、各務支考編の俳論書『葛の松原』を見る必要があるだろう。本書では、芭蕉の「取合せ」における斧鑿の姿が記されている。次は、長谷川櫂が、『葛の松原』を踏まえて、芭蕉の「古池」の句の「取合せ」について論じた文である。やや長い引用となるが、「蛙」と「山吹」の違いを明らかにするために、『万葉集』や『方丈記』などの例を示さねばならないため、省略できる箇所がなかった。

支考のこの聞き書きには古池の句について興味深いことがいくつも書かれてある。その一つはこの句は上中下が一度にできたのでは

一八　奥村貞正「本意」『現代俳句大辞典』明治書院、一九八〇年。
一九　野林正路『詩・川柳・俳句のテクスト分析　語彙を図式で読み解く』和泉書院、二〇一四年、一二二―一二三頁。

なくまず中下の「蛙飛びこむ水のおと」が先にできたということである。

そこで上五を何としたものか、芭蕉が一瞬、黙したのだろう、すかさず、その場にいた其角が「「山吹や」としてはどうですか」と口をはさんだ。ここからわかるのは「蛙飛びこむ水のおと」という中下にはいくつかの上五が考えられたということ、これが二つ目である。「をよづけ侍る」とはませた口をきくこと。しかし、芭蕉は其角が勧めた「山吹や」を採用せず「古池や」とおいた。

まず芭蕉が詠んだ「蛙飛びこむ水のおと」は当時はこれだけで驚くべき表現だった。というのは和歌や連歌はいうまでもなく、貞門、談林の俳諧においても蛙は鳴声を詠むものと決まっていたからである。この伝統を生み出した和歌ではカハヅといえば今いうカエルではなく河鹿のことだった。河鹿は清流にすむ小さなカエルで、夜、石に上って鈴を振るような涼しい声で鳴く。

それを芭蕉は河鹿ではなく、その辺の水辺でのどかにはねて遊んでいるただのカエルをカハヅとしてこの句に詠んだ。その座に居合わせた其角らはこの中下を聞いて「これはおもしろい」とうなずいたはずである。

では、上五を何とするか。ここで其角が「山吹や」を提案したのにはこれもまた文学史的な根拠がある。和歌では古くから河鹿の声を必ず山吹と取り合わせてきた。

かはづ鳴く甘南備河にかげ見えて今か咲くらむ山吹の花

厚見王(『万葉集』)

かはづなくゐでの山吹ちりにけり花のさかりにあはまし物を

読人知らず(『古今集』)

『万葉集』の歌にある「甘南備河」(神無備川)はどの川かわかっていないが、『古今集』の歌の「ゐで」(井出)とは京都府の南、井手町の山あいのこと。ここを流れる井出の玉川は古くから河鹿の名所であり、また山吹の名所でもあったので、蛙と山吹はいつの間にか切っても切れない組み合わせになった。そこで、岸辺に咲き乱れる山吹の黄金色の花がまぶしく映える清流の水面で美しい声で鳴く蛙が和歌でも連歌でも俳諧でも詠まれることになった。

『方丈記』の作者、鴨長明は優れた歌人でもあった。その歌論書『無名抄』にこの井出も蛙が登場する。

世の人の思ひて侍るは、たゞ蛙をば皆かはづと云ふぞと思へり。それも違ひ侍らね共、かはづと申す蛙は、外にはさらに侍らず、只井出の川にのみ侍るなり。色黒きやうにて、いと大きにもあらず。世の常の蛙のやうにはあらはに跳り歩くこともいとせず、常に水にのみ棲みて、夜更る程にかれが鳴きたるは、いみじく心澄み、物哀なる声になん侍る。

この真に迫った河鹿の描写からすると、長明は「井出の玉川の蛙」を実際に見たことがあったにちがいない。そのカハヅは普通のカエルのようにはねることもなく、普段は水の中にいて夜更けに美しい声で鳴く河鹿だった。

芭蕉の「蛙飛びこむ水のおと」という中下を聞いて、其角はこの井出の蛙を思い出し続けて蛙と一緒に和歌に詠みこまれてきた井出の山吹を連想したのである。そこで「山吹や」を提案した[二〇]

この引用部に例示されている通り、芭蕉は「古池」の句を詠むにあたって、上五を「山吹や」とするか「古池や」とするかで、それまでの季語の約束事とは異なる立場をとっている。そのような中で、古歌との兼ね合いで「蛙」との「取合せ」を考える際に働く季語の約束事こそ、当時の共同幻想における「美しさ」を背景とした季語の本意なのである。

二〇 長谷川櫂『古池に蛙は飛び込んだか』中公文庫、二〇一三年、一八―二一頁。

一章二節　歳時記の歴史と季語としての承認

前節では、季語の歴史と機能について触れた。本節は、歳時記の歴史を纏めておく。また、歳時記に収載される季語が、いかにして季語たる承認を受けるのかという点にも触れておきたい。

歳時記の起源は、古来中国において季節の変わり目の節句ごとに行う様々な行事を定めた「月令（がつりょう）」にあり、はじめて「歳時」の名を用いたのは、梁の宗懍が編纂した『荊楚歳時記』であった。日本においては、中世、連歌の時代にはじまり、紹巴の『至宝抄』などがあるが、厳密には、いずれも今日言われる歳時記以前の形態のものであった[二二]。

今日、俳句で意味される歳時記とは、季語を集め分類し、季節ごとに配列し、解説と例句を挙げたものを指す。こうした近代的な歳時記の形態を取るはじまりは、子規の高弟である寒川鼠骨が編纂し、一九〇三年に出版した『歳時記例句選』からであった[二三]。

明治期の歳時記の変遷について、概観しておきたい[二三]。明治五年に布告された現行の太陰暦から太陽暦への暦の変更は、一八七二年（明治五年）十二月三日を明治六年一月一日とすることで行われ、以来、能勢香夢編『俳諧貝合』や横山利平編『新編俳諧題鑑』等の太陽暦歳時記の編纂が始まる。こうした試みの流れは、旧暦の歳時記等と混交されながら、やがて中断され、寧ろ類題句集編纂の方へ変換されることとなる。明治二〇年代になり、馬琴編纂の『俳諧歳時記栞草』の復刻ブームが起こり、複数の出版社から刊行される。冒頭にあげた虚子の記述と照らし合わせると、この頃と合致する。明治三〇年から明治四〇年代にかけて、「年中行事」ブームが起こり、風俗画報増刊『新撰東京歳時記』（明治三十一年）や槌田満文編『明治東京歳時記』（明治四十三年）が刊行される。日清・日露戦争前後の日本文化見直しの中で起きたブームであり、こうした風潮は、北京における郭崇編『燕京歳時記』（明治三十九年）や朝鮮における洪錫謨編『東国歳時記』（明治四十四年）などアジアの歳時記出版とも関連した[二四]。さて、明治期までの歳時記を概観してきたが、これ以降においては、次章で先行研究を具体的に検討し、「近代季語の枠組み」とそれを巡る言説を明らかにしたい。

二二　前掲、「解説」、同頁。
二三　前掲、『季語は生きている　―季題・季語の研究と戦略―』、五六頁。
二三　以降、暦についての記述が増える為、西暦と和暦が混交されるが許されたい。
二四　前掲、「解説」、同頁。前掲、『季語は生きている　―季題・季語の研究と戦略―』、同頁。

では、次に、季語がどのように承認されるのかという点について触れておきたい。前節において言及した通り、宮坂静生は季語について「平安貴族が想定した共通の規範に基づく共同幻想」であると指摘し、ハルオ・シラネは「連歌連句から発生した共同体のコンテクストと作用しあう」と指摘した。これらの指摘からも明白であるように、季語とは「共同体」における想像力としての本意を獲得することで、季語として承認されるのである。

ただし、勿論のことながら、このような形で承認された季語のみが歳時記に掲載されるわけではなく、新たな季語を歳時記に掲載し、本意を獲得するべく普及が図られる場合もある。それは、序論において引用した虚子の記述にも見て取れる。

> 私たちが俳句を作り初めた頃には曲亭馬琴の拵らえた歳時記が一つあったばかりであって、その他にはそういう種類の書物はなかった。…（略）…またその頃の俳書堂主人の籾山梓月君の発意から中谷無涯氏に嘱して『新修歳時記』一冊が発行された。これは最も厳密な選択になった書物であって、私たちの座右に備えておいて日夕の参考とするのに最も便利な書物であったが、大震災の時にその紙型が焼失してしまって重版することの出来ないのは残念なことである。しかしながらこの『新修歳時記』も主として人事、殊に宗教上の儀式に関する事は旧暦によっている。東京在住者にとってはそれらの行事は悉く新暦にひき直して行われて居るので夏の季題が春になったり秋の季題が夏になったりして居ることなどがたくさんあって頗るまぎらわしい。…（略）…大震災以後になって種々の歳時記が出版されて、それらの書物は争って新題を取り入れて居るようである。私は詳しくそれらの書物を見ないからここに何ともいうことは出来ない。（昭和五年十二月）[二五]

現代においても、季語の承認は、同じ様相を呈している。

新しい季語を使った秀句が広く認められて、歳時記や季寄せに採用されるのです。逆に、編纂者のすぐれた意図によって、例句は一句もないが季語として扱ってもいいという語を歳時記に載せ、その結果後から多くの作品が詠まれるという例もあります[二六]

二五　前掲、高浜虚子「歳時記」、同頁。

二六　島谷征良「新季語はどうしたら登録されるの？」『俳句って何？』邑書林、一九九二年、九七頁。

いずれにせよ、歳時記の編者による判断が大きな要因となるが、古くからある季語だとしても、新しく取り入れられた季語だとしても、多く詠まれる季語は歳時記に長く掲載され、詠まれなくなった季語は掲載から漏れてゆく[二七]。基本的に、歳時記はこうした可変的な書物であり、詠む行為と相互に作用するということを念頭に置いておきたい。

二七　夏井いつき『絶滅寸前季語辞典』（東京堂出版、二〇〇一年）、夏井いつき『続・絶滅寸前季語辞典』（東京堂出版、二〇〇三年）、夏井いつき『絶滅危急季語辞典』（ちくま文庫、二〇一一年）などが、その例。

二章　「近代季語の枠組み」と虚子の方法

前章で、季語と歳時記の歴史、またそれらの機能についてまとめた。また、前述の通り、「俳句における近代」は子規の俳句革新をパラダイムとしてよく語られて来たが、「季語における近代」は、俳句における近代として語られるそれとは違うパラダイムによって記されていた。

本章では、前述した季語と歳時記を大枠としながら、先行研究が提示する「近代季語の枠組み」について考察から始める。また、本章の後半では、「近代季語の枠組み」に内包されたものとして虚子の季語に対する方法を検討する。

さて、先行研究における「近代季語の枠組み」について、結論から先に述べるならば、「季語における近代」に対しては、虚子が多大な影響を与えたということが、考察の前提となっている。具体的には、虚子が編集した『新歳時記』及び、その後の改訂版や増訂版が「近代季語の枠組み」として位置付けられている。

勿論、当時出版された歳時記は『新歳時記』のみではなかったし、本章で中心的に取り上げる先行研究である西村睦子の論においては、そのような観点から、当時出版されていた歳時記と『新歳時記』とを並置しつつ、虚子の手によって、どの季語が採られ、どの季語が削られたのかを一つずつ丁寧に拾い集める方法を取っている。個別の季語の取捨を細かく辿ることから、虚子の作り上げた枠組みを具体的に描きだそうと試みるのである。ただ、こうした細かい実証とは裏腹に、虚子の言説を照らし合わせることで、考察に一応の結論が付される。虚子の季語に対する思想が『新歳時記』の枠組みに当てはまることの証明にはなっているが、しかしなぜ『新歳時記』の枠組みが、そのまま「近代季語の枠組み」になっているのかについては、全く見当がなされてないと言っていい。その他にも季語の近代に対する虚子の影響を認める研究は多く存在するが、西村と同様にその検討は未だなされないのが現状であろう。本章において、このような状況を検討するためにも、ここでは以下の引用に基づきつつ、西欧文学における「カノン＝正典」の議論を簡単に検討しておくこととしたい。

> ギリシャ語のｋａｎｏｎに由来する用語で、基準や規則を意味する。その初期の使用法では、聖書をめぐる選別された権威的テクストや、「聖者の列に加えられた」神学者たちを指していた。ジョン・ギロリーが指摘したように（そしてこれがいまや文学文化に持ち込まれているこの用語の主要な特徴を確立したのだが）、初期のキリスト教の正典承認者たちは、排除の原理によってこれら操作していた。すなわち、「彼らは何よりも異端なものから正統なものを区別することに関心があった」（Ｇｕｉｌｌｏｒｙ １９９５:２３３）
>
> その後正典は一連の「偉大な作品」として理解されるようになる。それは古典時代から現代ヨーロッパ文学に至り、ホメロスやダンテ、

ミルトン、シェイクスピア、T・S・エリオット、といった著名な作者の作品を指すとみなされてきた。これらの作品は、美学を体現するものとして、また道徳的あるいは「人間的」な普遍的価値を体現するものとして擁護される。こうした事態は明らかに価値判断と差別化のプロセスを含んでいるが、それは循環的で自己を正当化するプロセスである。というのも、真に偉大なものは疑われることなく偉大だと考えられ、この観点からすればそれは価値判断を越えている、というのだから。それらの正典としての地位は自明であり、我々はそれを認識するかしないかのどちらかなのだ。もちろんそのような正当性が依拠するのは権威、つまり、正典的テクストとその専門的解釈者の「いわずもがなの権威」と言われるものである[二八]

この引用において説明されている「正典」の選別方法は。先行研究における『新歳時記』の位置づけ方にも見出される制度であるといえる。それらの研究においては、当時出版されていた歳時記と『新歳時記』とを同等のテクストとして扱うことは無かったし、なぜ『新歳時記』が近代の季語のあり方に影響を与え、近代季語の枠組みとなるのかは、検討されることはなかった。このような研究などの承認・選別装置を介することで、『新歳時記』は近代の季語体系における「正典」となり、「いわずもがなの権威」による加護を受けるに至ったのである。

こうした先行研究に対して、位置づけられた「正典」のあり方に異議を唱え、当時出版されていた歳時記と『新歳時記』とを同等のテクストとして扱い、さらには今一度「ニュートラル」な近代季語の枠組みを再構成するという研究の方法も考えられる。だがしかし、そこに新たに再構成された「ニュートラル」な枠組みが、実際に使用されていた季語の体系と、完全に一致するかは疑わしく、新たな矛盾を孕むことに他ならないだろう。

さらに言えば、現代も「正典」として依拠され、使用され続ける『新歳時記』に対しては[二九]、「ニュートラル」な枠組みを改めて提示したところで、既に過ぎ去った「異端」、或いは「正典」になれなかったものとして、一瞥されてしまう可能性を拭い去ることは出来ない。

本研究は、こうした先行研究の現状において虚子の言説と一体になった「近代季語の枠組み」をあえて踏襲しながら、虚子が自らの体験し、表象不可能であると判断した関東大震災をめぐる季語「震災忌」を考察することで、虚子が「近代季語の枠組み」の外側に置いた意味を照射

二八 ピーター・ブルッカー著、有元健・本橋哲也訳『文化理論用語集　カルチュラルスタディーズ＋』新曜社、二〇〇三年、一三二頁。

二九 現在も版元の三省堂から出版され続け、電子版の刊行も行われている。深見けん二『虚子編『新歳時記』季題一〇〇話』（飯塚書店、二〇一四年）などによる新たな正典化の試みも見られる。

したい。

二章一節　先行研究における虚子編『新歳時記』の評価

本研究の目的は、「震災忌」の成立と表象の困難さを、関東大震災以降の歳時記の変遷を辿りながら考察することで、近代における季語の言説と枠組みを改めて検討することにある。そのために、本節では関東大震災以降の歳時記の変遷を辿る前提として、先行研究における「近代季語の枠組み」と、それを巡る言説を明らかにしておきたい。そうすることによって、「近代季語の枠組み」と「震災忌」の関わりをひとまず明らかにしておこう。

本論の先行研究としては、西村睦子『「正月」のない歳時記―虚子の作った近代季語の枠組み』と福井咲久良「高浜虚子編『新歳時記』の三種版」を主に検討することにしたい。これらの研究に着目する理由とは、以下の通りである。まず前者は、当時出版されていた歳時記と『新歳時記』とを並置し、虚子の手によって、どの季語が採られ、どの季語が削られたのかを一つずつ丁寧に考察している。そうすることにより、虚子の作り上げた枠組みを具体的に企図しようとするもので、細緻な実証性を提示している。本稿が用いる「近代季語の枠組み」という用語も、西村の研究における用語である。続いて、後者の研究は、多くの先行研究を網羅し、虚子の近代における季語への影響を認め、『新歳時記』の改訂、増訂における背景を図表を用いて分析している。細緻な実証性と先行研究の網羅性から、これらの論文を主に検討に用いることとする。

まず、両研究の『新歳時記』への評価から検討する。

西村睦子『「正月」のない歳時記―虚子の作った近代季語の枠組み』における虚子編の『新歳時記』へ対する評価を見てみる。

> 今から振り返ってみると、現在の季語の枠組みはこの改造社版(春・冬は虚子担当)と虚子編によってほぼ作られていたことが分かる。歳時記という言葉さえこの二書により確定した。それまでは歳事記と歳時記両方用いられていたのだから。就中虚子編に登録されることは季語として市民権を得ることなのであった。虚子編に採用した個々の題の影響は今も明確に残っている。虚子編が今も現役の歳時記であり、虚子門から出た人々が現代の歳時記を編み、俳壇を形成している以上当然のことである。そして大切な点は、季語開拓の分野に虚子が確たる方向性を示したことだろう。

本稿では明治期以降誕生した個々の季語について、両歳時記に採用されるまでの経緯を追うことによって、その辺を明らかにしたい。

それには[ホトトギス]の雑詠選を調べねばならない[三〇]

同時代に出版された歳時記を並置し、季語一つずつを検証していく確固とした方法と裏腹に、西村の述べる前提は、あくまで虚子に対する言説を踏襲するに留まってしまっている。例えば、文中の「現在の季語の枠組みはこの改造社版(春・冬は虚子担当)と虚子編によってほぼ作られていたことが分かる」に関しては、特に具体的な提示がなされていないし、「虚子編が今も現役の歳時記であり、虚子門から出た人々が現代の歳時記を編み、俳壇を形成している以上当然のことである。そして大切な点は、季語開拓の分野に虚子が確たる方向性を示したことだろう」に関しては、俳句史において非常に重要な扱いを受ける吉岡禅寺洞や日野草城らの『ホトトギス』からの除名や、秋桜子の虚子に対する思想的な離反を全く算段に入れていない。そのため、ここで西村が述べる「俳壇」がどのようなものであるか、全く見当がつかなくなってしまっている。

福井咲久良による『新歳時記』への評価は次の通りである。

俳句革新運動を行いながらも、季寄せや歳時記は遺さなかったとされる正岡子規の没後から、高浜虚子は『袖珍俳句季寄せ』を初めとする、いくつかの俳句の季寄せや歳時記の編集に携わった。彼の俳句観、季題観が俳壇に与えた影響の深さは、この事実からも十分察せられる。そして虚子の生涯最後の単独責任編集歳時記であり、虚子の歳時記・季寄せ編集の集大成とされるのが、虚子編「新歳時記」である。今日も増刷され続ける『新歳時記』はまさに、虚子の生んだロングセラーである。

しかしながら、『新歳時記』についての先行研究は決して多くはなくそれらは『新歳時記』に少なくとも三版種が存し、三版種間に異同や差異がみられることを自明の理としつつも、異同や差異を論じる際、その全体像にはあまり触れていない。

本稿は虚子編『新歳時記』三版種間のすべての首題の異同を調査することによって、『新歳時記』の改訂、再改訂のあり方を明らかにし、さらに異同の見られた首題を複数取り上げて、二度の改訂の実施の背景を考察するものである[三一]。

福井の研究は、その記述の通り、『新歳時記』のすべての首題の異動を表とし、改訂の背景を考察したが、その結論は「有力な一因として、

三〇 西村睦子『「正月」のない歳時記―虚子の作った近代季語の枠組み』本阿弥書店、二〇〇九年、三十―三十一頁。
三一 前掲、「高浜虚子編『新歳時記』の三種版」、一頁。

やはり敗戦を考えざるを得まい[三二]、「少なくとも、敗戦後の外地喪失、軍の解体、祝日の変更、農地制度の変更などと時期をほぼ同じくして、多くの季題が『新歳時記』から姿を消したり、一部は新たに登場したりしていることは、表1、2から明らかである[三三]」と述べ、先行研究である井出原太郎や本井英による「熱帯季題」の観点に大きく懐柔されるものとなっている。

福井の研究において、虚子の「俳句観、季題観が俳壇に与えた影響の深さ」についての根拠は、「いくつかの俳句の季寄せや歳時記の編集に携わった」とされるのみである。西村の研究同様、ここでも「俳壇」が如何なるものか示されておらず、どのような範囲において影響があたえられたのかが判然とせず、膠着の甘いものとなってしまっている。福井は、『新歳時記』に引き続き、虚子編による『季寄せ』の考察も行っているが[三四]、そこでも「近代季語の枠組み」の明確な根拠は明らかになることはなかった。

三二 前掲、「高浜虚子編『新歳時記』の三種版」、六頁。
三三 前掲、「高浜虚子編『新歳時記』の三種版」、六頁。
三四 福井咲久良「高浜虚子編『季寄せ』考：『季寄せ』改版と虚子編『新歳時記』修改訂の関係性」『三田國文』五一号、慶應義塾大学国文学研究室、二〇一〇年六月。

二章二節　「近代季語の枠組み」について

では、西村の研究における「近代季語の枠組み」を具体的に検討してみる。西村が、虚子編の『新歳時記』と並置して、検討に用いた明治期以来の歳時記は、次の通りである。

明治三十六　高浜虚子編『袖珍俳句季寄せ』
明治三十七　寒川鼠骨編『俳句新歳時記』
明治四十一　今井柏浦編『俳諧例句新撰歳時記』
明治四十二　中谷無涯編『新脩歳時記』
明治四十二　岩本梓石・宮沢朱明『新撰俳諧辞典』
大正三　籾山梓月編『新撰袖珍俳句季寄せ』
大正五　柏浦編『増補版新撰歳時記』
大正八　長谷川零余子編『俳句歳時記』
大正八　『ホトトギス』一月号綴込付録「写生を目的とする季寄せ」
大正十四　柏浦編『新校俳諧歳時記』
大正十四　高木蒼梧編『大正新修歳時記』
大正十五　柏浦編『詳解例句纂修歳時記』
昭和三　宮田戊子編『昭和大成新修歳時記』
昭和五　蒼梧編『季題例句俳諧歳時記』
昭和五　小泉迂外編『最新俳句歳時記』
昭和六　柏浦編『詳解例句歳時記大観』
昭和七　吉田冬葉編『新成歳時記』
昭和七　水原秋桜子編『現代俳句季語解』

昭和八　高浜虚子他編『俳諧歳時記』（以降、改造社編）
昭和九　上川井梨葉編『袖珍俳句季寄せ』
昭和九　高浜虚子編『新歳時記』

これらの中で『新歳時記』と、特に読み比べられるべきものとして、大谷句佛、青木月斗、松瀬青々らと共に虚子が編集を行った『俳諧歳時記』が挙げられている。これは、『新歳時記』の前年である昭和八年に改造社から刊行されており、当時の著名な俳人や識者を集結し、出来るだけ多くの季語と的確な解説を加えようと編まれた全五巻の大歳時記である。西村は、この『俳諧歳時記』と『新歳時記』とによって現在の季語の枠組みは形成されたとした上で、そのように形成された「近代季語の枠組み」が現代の季語の枠組みへ結節したとする。

この他には、明治三十六年刊行の豆本サイズの季寄せである高浜虚子編『袖珍俳句季寄せ』が、歳時記に初めて新年の部立てを採用した歳時記として、虚子の基本的な歳時記へ対する考えが既に示されていた一冊であると重視されている。ここに見られる春夏秋冬に新年を加える部立ては、明治三十七刊行の寒川鼠骨編『俳句新歳時記』、明治四十一刊行の今井柏浦編『俳諧例句新撰歳時記』、大正三年刊行の籾山梓月編『新撰袖珍俳句季寄せ』、大正八年刊行の長谷川零余子編『俳句歳時記』、大正十四年刊行の高木蒼梧編『大正新修歳時記』、宮田戊子編『昭和大成新修歳時記』、昭和七年刊行の吉田冬葉編『新成歳時記』、昭和八年刊行の改造社編『俳諧歳時記』などに影響を与えたとし、近代における本格的な歳時記、季寄せの出発点であると位置づけた。また、『袖珍俳句季寄せ』の版権は、虚子から籾山梓月に譲渡され、大正三年刊行の籾山梓月編『新撰袖珍俳句季寄せ』の下地となっている。

私たちが俳句を作り初めた頃には曲亭馬琴の拵らえた歳時記が一つあったばかりであって、その他にはそういう種類の書物はなかった。…（略）…またその頃の俳書堂主人の籾山梓月君の発意から中谷無涯氏に嘱して『新修歳時記』一冊が発行された。これは最も厳密な選択になった書物であって、私たちの座右に備えておいて日夕の参考とするのに最も便利な書物であったが、大震災の時にその紙型が焼失してしまって重版することの出来ないのは残念なことである[三五]

これは、本論の冒頭に挙げた虚子の歳時記を巡る記述である。籾山梓月編『新撰袖珍俳句季寄せ』は、虚子編の下地を持ちながら、明治四

三五　前掲、『俳談』、六十一―六十二頁。

十二年刊行の中谷無涯編『新脩歳時記』からも多くの季語を採用している。西村は、こうした背景から編纂者は違っても、虚子の歳時記への影響があることを見てとる。

更に、これら歳時記や季寄せの他に『新歳時記』と並置されるものとして、雑誌『ホトトギス』の雑詠欄をまとめた『ホトトギス雑詠全集』を挙げている。明治以降に作られた季語が『新歳時記』と『俳諧歳時記』に所載されるまでの過程において、『ホトトギス』の雑詠欄に、季語の誕生と定着の様子を見ることが出来ると考えてのことである。

『ホトトギス雑詠全集』は、『俳諧歳時記』と『新歳時記』に先行して刊行されており、全集最後となる『新撰ホトトギス雑詠全集』が、『新歳時記』の改訂版との間に刊行されている。以下に記したのは、それらの年表であり、それぞれの『ホトトギス雑詠全集』に集載される句が何年から何年までの『ホトトギス』に掲載されたかを、一目で分かるように、年号を付したものだ。

大正二年―昭和五年　『ホトトギス雑詠全集』（十八年間十二冊）
昭和六年―七年　『続ホトトギス雑詠全集』（二年間四冊）
昭和八年―九年　『第三ホトトギス雑詠全集』（二年間四冊）
―昭和八年　虚子他編『俳諧歳時記』
―昭和九年　虚子編『新歳時記』刊行
昭和十年―十五年　『新撰ホトトギス雑詠全集』（六年間九冊）
―昭和十五年　虚子編『新歳時記　改訂版』

こうしたテクストの位置づけの上で、西村は、『新歳時記』における虚子の編纂までの道のりを次の様に企図する。

明治三十六年刊行の高浜虚子編『袖珍俳句季寄せ』において、太陽暦以降曖昧であった歳時記に新年の部立てが初めて採用される。そこから部立てや掲載する季語の影響を受けた明治期の歳時記の有象無象やホトトギスの雑詠欄などの季語の増量が『俳諧歳時記』の膨大な季語に見られる。翌年刊行された『新歳時記』において、虚子の編集方針のフィルターを経て、季語の体系が精選される。こうして出来上がった「近代季語の枠組み」が現代における季語の枠組みへと引き継がれる、という具合である。

勿論、現代へ引き継がれる過程で、先述した福井の研究にも見られるように、『新歳時記』は改訂と増訂を経て、「熱帯季題」や「軍事関連

の季題」を取捨している。また、改訂以降取り入れられた季語は、「撒水車」、「水餅」、「西日」、「ボート」、「ヨット」の五つ、増訂から取り入れられた季語は、「人日」、「天皇誕生の日」、「文化の日」の三つであり、大きな増減としては、敗戦を背景とした「熱帯季題」や「軍事関連の季題」である。今日に至るまで、季題の移動がなかったわけではない。

では、『新歳時記』に収載される季語の条件とはどのようなものだろうか。虚子は、その序において『新歳時記』の編集方針を述べている。次は、示された編集方針に沿って、改造社版の『俳諧歳時記』と『新歳時記』とを西村が読み比べ、例を付したものである。

1　俳句の題として詩のあるものは採る、として従来は傍題扱いの題をどんどん首題として独立させた。

改造社版「新樹」（新緑）
虚子編「新樹」「新緑」
改造社版「秋の水」（水澄む）
虚子編「秋の水」「水澄む」
改造社版「名月」（良夜）
虚子編「名月」「良夜」

2　写生して作りやすいもの、絵になるような具体性をもったものや行為や現象を新しく採用する。

「片陰」「夜店」「独楽」「春時雨」「盆梅」「マスク」「毛糸編む」「木の実落つ」「咳」「紙漉き」「隙間風」「ねんねこ」「灯涼し」などはみな虚子が作った季題。

3　具体的な動作やモノは全部個別の題として扱う。

改造社版「雪遊び」（雪まろげ・雪合戦・雪礫）
虚子編「雪遊び」「雪まろげ」「雪合戦」「雪礫」
「夕顔撒く」「薔薇の芽」「萩若葉」「嫁菜摘む」「苗木植う」

従って「名草枯る」式の一括題はない。

4　簡潔な表現にする。（極力短く、分かり易くする）

改造社版「春の泥」→虚子編「春泥」

改造社版「七五三の祝」→虚子編「七五三」
改造社版「鼠麹草」→虚子編「母子草」
改造社版「稲刈」(稲架)→虚子編「稲刈」「稲架」

5　表現の優れたものを採る。ユーモラスなものを採る

改造社版　「蝉の蛻」(空蟬)→虚子編「空蟬」(蟬の殻)
改造社版　「桜の実」(さくらんぼ)→虚子編「さくらんぼ」
改造社版　「葱の擬宝」(葱坊主)→虚子編「葱坊主」
改造社版　「芽ばり柳」(芽柳)→虚子編「芽柳」

虚子はこれらの基準に従って使われない古い題をバッサリ捨て、新題も傍題もためらうことなく首題として採用した。社会の変化に対応しどんどん投句される句の中から誌友のニーズをキャッチし、これは題になる、と虚子が採用すればそれが季題になったのである[三六]

『新歳時記』の序による虚子の方針は、季語の表記の細緻にまで至っており、西村はそれらの違いを細かく実証している。実証の末に、『新歳時記』がそれまでの歳時記と大きく違う点として、明治三十六年刊行の『袖珍俳句季寄せ』において、新年の部立てを採用し、自ら確固たるものとした太陽暦の歳時記のあり方を旧暦に戻したことである。季題の配列も時候・天文・地理・人事・動物・植物の区別ではない月別にしている。

西村は、この『新歳時記』の大きな転換について、正確には旧暦を装った太陽暦の歳時記であるとして、次の様に、虚子の方針の意を考察する。

ともあれ並んだ季題の種類は客観写生によって開拓された「花鳥諷咏シフト」の題、その扱いは旧暦による伝統的な季題趣味という折衷案を虚子編で見事に具現し、客観写生には旧暦による伝統的季題趣味という折衷案を虚子編で見事に具現し、客観写生による行き過ぎに、みずから実に巧妙にブレーキをかけている。カレンダー上の春夏秋冬の土台の上に、伝統的な美意識によるイメージとしての春夏秋冬をオーバーラップさせ、巧妙な二重構造を作り、俳句文芸の土壌たる歳時記に豊かな精神空間を作ろうとした。この客観と主観の見事

三六　前掲、『「正月」のない歳時記―虚子の作った近代季語の枠組み』、二十九―三十頁。

な融合があったからこそ、虚子編は今も生きているのだと思われる[三七]

西村の考察は、虚子による季語に対する方法論を土台に据えるものであった。確かに、このような考察から導き出される結論は興味深いものではあるが、しかしそのような方法論上の選択による副次的効果として、「近代季語の枠組み」が虚子の季語に対する方法論と膠着した状態となってしまっているのである。

次節では、虚子の季語に対する方法論を検討することで、「震災忌」が「近代季語の枠組み」の外側に置かれた経緯を検討する土台としたい。

三七 前掲、『「正月」のない歳時記―虚子の作った近代季語の枠組み』、四五二―四五三頁。

二章三節　虚子の季語に対する方法論

本節では、西村の考察が導き出した「近代季語の枠組み」と膠着してしまっている虚子の季語に対する方法を検討したい。

前章でも述べたが、虚子の季語に関する考察においても、子規の俳句革新が俳諧史／俳句史におけるパラダイムとして語られる。子規が普及させた「写生」というリアリズムの思想と方法を、虚子も同様の形で説くのであるが、しかし子規の述べる「写生」と虚子の述べる「写生」とは全く別物であったことを押さえておきたい。その違いとは、自然の景物をどのように捉えるか、つまるところ「写生」によって季語を如何に捉えるかという問題を巡るものであり、またその違いは彼らの間の「衝突」を生じせしめるに至った。

虚子は、明治三十七年三月十日発行の『ホトトギス』にて、「写生趣味と空想趣味」と題した文章を残している。時期から見て、明治二十八、二十九年頃と想定される[三八]。

大まかな内容を述べると、虚子が、子規と連れ立って道灌山の茶店に赴いた際、夕顔の花を前にして、子規が以前から述べていた写生によって季語の空想趣味を排するべきという主張に、反論したというものだ。江藤淳は、この衝突を巡って、子規と虚子の写生の有り様を次の様に検討している。

> この応酬は、いわば二人のリアリズム観の本質に触れた応酬にほかならない。「殺風景」かも知れないが、「写生」は必然的に「空想」、すなわち対象にまつわるアルージョンやアソシエイションを「排斥」しなければならぬとした子規は、期せずして逍遙にかなり近いところに立っていた。その理論の背景にあるのは科学であり、この場合「写生」の客観性という概念は、無限に自然科学の客観性に近づく。極言すれば、子規の意識のなかでは、「夕顔の花」は「夕顔の花」という言葉ではなくて、「其花の形状等目前に見る」印象の集合でありさえすればよい。ここでは言葉は言葉としての自律性を剥奪されて、無限に一種透明な記号に近づくことになるからである。
>
> これに対して、虚子にとっては、「夕顔の花」はいくら「写生」的、あるいは客観的に用いようとしても、言葉という一点から離れられぬものである。それは対象を指示はするが、決して透明な記号にはなり切れない。換言すれば、この「夕顔の花」という言葉は、子規が主張するように、全く自分の自由になり、自分の感受性だけに支配される透明でニュートラルな、無性格なものではあり得ない。したがって、もし俳句における「写生」が言葉によって成立するものなら、それは厳密には「古人の知らぬ新たらしい趣味」などというもの

三八　江藤淳『リアリズムの源流』河出書房新社、一九八九年、二十七頁。

ではあり得ず、どこかに「歴史的連想」の附着したものでしかないはずである。「写生」が新しくないとはいわない。しかし「今親しく比夕顔の花を見ると以前の空想的の感じは全く消え去りて新たらしい写生的の趣味が独り頭を支配するやうになる」などというのは不正確である。少くともそれは一種のイデオロギー的誇張である。

いわば虚子は、言葉が言葉でありつづけるかぎり、それは人工言語(たとえば数式や論理記号)の場合のような純粋な記号にはなり得ず、また文学者はそのような言葉(自然 言語)によってしか認識をおこなえない、ということをいおうとしたのである。「夕顔の花」というとき、人はたとえば、『源氏物語』の「夕顔」の巻に描かれている、あの薄倖の美女のイメージを「排斥」することは到底できない。そういう「歴史的連想」だけが除去できないのではない。そこには「ユウガオノハナ」という音声的な連想もあり、人はこれからものがれられない。このような「空想的」要素を「一掃し去る」というのは、俳句を不必要に「殺風景」にし、言葉の可能性を狭めるものではないか。

この議論がいかに本質的なものかということは、繰り返すまでもない。子規はいうまでもなく、偶像破壊的な革新家として極論しようとしていた。これに対して虚子は、この偶像破壊的革新家の、イデオローグとしての一面を衝いたのである。子規の没後、まさにこの点をめぐって虚子と碧梧桐のあいだに激しい論争がおこり、二人は間もなく相容れることのない宿敵となった〜(略)〜

虚子の主張の第一点は、言葉が言葉(自然言語)にとどまるかぎり、それは決して過去からの連想を完全に脱却することはできない、というところにある。したがって、革新の情熱がいかに激しく、その必要がいかに自明であったとしても、言葉を用いて「写生」し表現しようとする以上、「新派俳句」が過去とまったく絶縁することは不可能である。詩人も作家も、古来用いられて来た母国語によって書くほかはない。かりにまれに外国語で書くとしても、その外国の文化のなかで時間と連想の堆積を負わされた言葉を用いるほかはない。つまり、文学がいかに激しく「打破刷新」を求めるとしても、それは決して過去からの持続を断ち切ることができない。なぜなら、それは言葉によって書かれ、言葉には必然的に、現在と個性を超える契機が内包されているから。

さらに虚子は、言葉が純粋な記号ではあり得ないとするなら、「写生」とは決して感受性に刻印された、単なるものの印象の集合ではあり得ない、という。むしろそれは撰択である。そしてこの撰択が、結局想像力の作用によっておこなわれるのであってみれば、「写生」そのものがすでに想像力を内包するとしなければならない。無数の印象のなかから、「春雨」と「蓑傘」、それに「ものがたる」という三つの要素を撰択しこれらを結合させたとき、詩人蕪村の論理が生れた。それは想像力の撰択であり、詩の論理そのものである。すなわち「写生」とは、印象の記録であるばかりでなく、当然イマジネーションの作用をともなうものである。

第三に、これは虚子があからさまにいっていることではないが、ここからいわば系としてみちびき出されることがある。それは「写生」と他者の問題である。もし言葉が透明な記号ではあり得ず、「写生」が単なるものの印象の集合であり得ないならば、それは決して詩人、あるいは作家の感受性の絶対的な優位を証明するものとはなり得ない。なぜならすでに明らかなように、言葉は詩人や作家の恣意にゆだねられ、その特異な感受性にのみ奉仕する道具ではあり得ないからである。つまり「写生」とはエゴイズムの表現ではない。過去からも、他者からも切りはなされ、ものとだけ対坐している詩人や作家の、「殺風景」なエゴの正当性を証明するものでは、それはあり得ない。言葉を用いてなされる以上、それは必然的に過去に持続し、他者と社会に開かれたものとならなければならない[三九]

子規の「写生」と虚子の「写生」とが方法として、或いは思想としていかなる違いを持つかを検討するために、「夕顔の花」という季語をめぐって、季語とリアリズムの関係について検討する必要があり、長い引用となってしまった。ここでは改めて、以上の引用において展開される子規と虚子の「写生」における相違点について、江藤の考察をまとめておこう。子規は、「写生」によって「季語」を客観的に把握し、「無限に一種透明な記号に近づけること」で、「季語」のもつ連想を排斥しようと考える。対して、虚子は、「言葉が言葉(自然言語)にとどまるかぎり、それは決して過去からの連想を完全に脱却することはでき」ず、「言葉が純粋な記号ではあり得ないとするなら、「写生」とは決して感受性に刻印された、単なるものの印象の集合ではあり得ない」ということであって、掘り下げて言えば「言葉を用いてなされる以上、それは必然的に過去に持続し、他者と社会に開かれたものとならなければならない」という反論を述べている。

虚子は、季語における「歴史的連想」や広い意味でのコード、本意を「写生」によって消し去ることは不可能であると考えるし、たとえそれが可能だとして、それらを一掃することは、俳句を「殺風景」にし、言葉の可能性を狭めるとする。ここで虚子が述べる「殺風景」という言葉は、序論にて示した虚子の震災を巡る表象不可能性の言説にも見られ、「歴史的連想」を排したと状態を指す。

虚子はこうした意味において、次の柄谷行人の批判にいくらか自覚的であったと言えよう。柄谷は、子規の蕪村評価を通しての「写生」について、以下の様に指摘する。

子規が蕪村の俳句の絵画性を大々的に評価したときにも、同じことがいえる。蕪村の俳句は彼の山水画と同位にあり、「写生」をとなえていた子規の感受性とは異質なのである。もちろん蕪村と芭蕉はちがう。しかし、彼らの差異は今日のわれわれがそこにみるのとはち

三九 前掲、『リアリズムの源流』、二十九―三十二頁。

がったところに存したはずだ。実際子規自身がそういっている。たとえば蕪村の絵画性は、彼が蕉風とちがって、漢語を大胆にとりれたところにある。「五月雨や大河を前に家二軒」という句においても、大河（おおかわ）ではなく大河（たいが）であるがゆえに、激しい動きが活き活きと「描写」されていると、子規は考える。ところが、この例こそ、蕪村が風景ではなく文字に魅かれていたことを示すのである〜（略）〜

風景とは一つの認識的な布置であり、いったんそれができあがるやいなや、その起源も隠蔽されてしまう[四〇]

つまり、「風景」をあるがままに写し取ることは「写生」という方法においては既に挫折しているが、その理由とは「季語」を用いることで「歴史的連想」を引き込んでしまうことになってしまうためである。このような柄谷の考察は、まさしく子規が述べる所の「写生」による「歴史的連想」を排する方法は不可能な認識方法なのである。虚子はこのことを前提において、理念であるリアリズムとしての「客観写生」と「歴史的連想」としての「花鳥諷詠」とを推進していくことになる。

それでは、虚子における「客観写生」と「花鳥諷詠」とは、どのような位置づけがなされているのだろうか。この点を確認することで、子規と虚子をとの間にある距離をより明確に測定したい。「花鳥諷詠」という言葉は、昭和二年六月の虚子の講演において初めて現れる。そのため、虚子の年譜において、大正期を「客観写生」の時期、昭和期を「花鳥諷詠」の時期とするのがほぼ定説である[四一]。決して、どちらかが相反することによって、衝突し、淘汰されたわけではない。

では、虚子は如何にして「客観写生」と「花鳥諷詠」とを、俳句の方法として行っていたのだろうか。仁平勝は、「客観写生」と「花鳥諷詠」とが衝突しない形で、虚子の方法となっていたことを指摘している。

虚子が信じた季題（季語）の普遍性とは、その「歴史的連想即ち空想的趣味」のことである。もっとも虚子は「歴史的連想」をもつ俳諧の季題（季語）だけでなく、次々と近代的な季題（季語）をみずから作り出したが、それらの条件が「空想的趣味」を支える根拠を、つまり虚子は季という題（季節感ではない）に求めたのである。それは発句に季を詠み込むという俳諧の約束をそのまま借りただけのことだが、他に神祇、釈教、恋、無常といった俳諧の題にくらべて春、夏、秋、冬という季の題は、近代においてその普遍性を失っていな

四〇 前掲、『日本近代文学の起源　原本』、二十七―二十八頁。
四一 前掲、『虚子の読み方』、三十三頁。

いと虚子は判断したかもしれない。

虚子の季題の方法は、中世人もやはり自分たちと同じようにそれぞれの季節を体験したはずだ、という「空想」の方法である。前にも述べたように、町をカップルで歩く（当時はアベックといったかな）女にふと視線がいって、するとどうも連れの男が気になってしまうのは、べつに師走の時期に限ったことではない。しかしそこに「師走」という季題（季語）を配することによって、きっと江戸の伊達男も、同じ師走の頃にそんなことをしただろうという「空想」が成立する。その「空想」が、ディテールに普遍性を与えるのだ[四二]

ここで、仁平が挙げる「もっとも虚子は「歴史的連想」をもつ俳諧の季題（季語）だけでなく、次々と近代的な季題（季語）をみずから作り出したが、それらの条件が「空想的趣味」を支える根拠を、つまり虚子は季という題（季節感ではない）に求めたのである」という指摘については、「近代季語の枠組み」に対する西村の考察にも見て取れる。季語のコードとしての働きや本意を介して、一句のディテールに普遍性を持たせるという方法が、リアリズムたる「客観写生」と「歴史的連想」たる「花鳥諷詠」とを矛盾させない方法なのである。また、西村の検討を振り返れば、こうした方法が「近代季語の枠組み」と膠着した状態にあるのである。

仁平同様、虚子の「写生」と「季語」の方法について、髙柳克弘も考察を行っている。髙柳は、前述した柄谷の指摘を踏まえて、実際に句を鑑賞しながら、虚子の「写生」と「季語」の方法と「風景」のあり方を考察する。

> 柄谷によれば、写実主義に興った明治二十年代以前の人間は、名所や旧跡の上に付与された、先験的概念を見ているに過ぎなかった。そこから完全に絶縁したのが、行きずりの何気ない風景や人間に魅力を覚える主人公を描き出した『忘れえぬ人々』であり、それ以前には、自分の感性や感覚を生かして風景を捉えるといった行為は存在しなかったことになる。だが、いったん風景が発見されてしまうと、それ以降を生きる人間は、あたかも昔から風景は存在していた、と考えるようになる。そして、「風景としての風景」「ただの風景」ではなく、概念としての風景を描いた言葉に対して、違和感を覚えたり、もしくはそうした違和感を黙殺して「風景」として一つ括りにしたりしてしまう。事実、虚子の句に対しても、叙景句という評価が一般的になっている。
>
> 虚子はまぎれもなく明治二十代以降の日本を生きた、近代人であった。だが、けっして近代的風景を描いた作家ではなかったのではな

四二 前掲、『虚子の読み方』、一四四―一四五頁。二段落目以降については、虚子の「女を見連れの男を見て師走」という句を踏まえての叙述である。

いか。

ここでもう一度、風景を極度に排除した〝空〟の句をふりかえってみたい。

冬の空少し濁りしかと思ふ
一塵を見つけし空や秋の晴

この句における〝見つけられたもの〟とは、すなわち「濁り」であり、「一塵」であること、それは論を俟たない。しかし、もしそうした発見を重んじるのであれば、「と思ふ」と「見つけし」の措辞は、それぞれの句において、むしろ不必要なのではないか。仮に「濁り」を主張したいのであれば、「と思ふ」などと曖昧な言い方はとるまい。同様に、「一塵」を言いたい場合には、「一塵を見つけし空」ではなく「一塵のありたる空」とするべきだろう。このことはつまり、虚子にとって、〝見つけられたるもの〟はさほど重要ではない、ということを示しているのではないか。

では「と思ふ」や「見つけし」といった措辞は、何を浮き上がらせているか。それは、観念し、発見している、「われ」という主体にほかならない。そのことで、単なる「風景」としての空ではなく、その下にいるみずからの存在までも伝えているのである〜（略）〜

この逸話には、虚子がどのように歴史や伝統を引き受けていたのか、そのヒントが隠されている。夕顔の先験的風景を、無化するわけでもなく、かといって子規のいうように、いっさいの歴史的な連想を排除する（それは柄谷のいう「風景としての風景」へつながる方法である）わけでもない。〝見ているわれ〟を提示し、伝統と現代とが接する瞬間を描き出すことで、どちらに偏ることもない、新しい詩情を探り当てたのである[四三]

高柳は、虚子が「先験的概念」として風景を見ている近代人のうちに終わりはせず、「客観写生」と「花鳥諷詠」といった歴史的連想の間に、「先験的風景」を無化するでもなく、一切排するのでもない「見ているわれ」を表出することで、過去と現在のどちらにも偏らない方法を用いたと論じる。

仁平の検討と同様に、「客観写生」と「花鳥諷詠」とが衝突するのではなく、風景が「歴史的連想」によって奥行を得るとしている。一方、高柳と仁平との異なる点とは、一句にディテールを与え、普遍性を持たせるとする仁平に対して、あくまで作中に「見ているわれ」を表出することで、過去と現代に偏らない瞬間を描き出すと高柳は考えるのである。

四三　高柳克弘「虚子の風景」『高浜虚子の世界』角川学芸出版、二〇〇九年、九十六―九十九頁。

二つの論を前にして、高柳の考察にいくつかの疑問が浮かぶ。ひとつには「空」を風景として扱うことができるのかということである。また、それを一度保留したとしても、ふたつめとして、柄谷の主張からすれば、認識的な布置ができあがるや否や風景の起源は隠蔽されてしまうのであって、そこに描かれた風景が、過去と現代に偏らない瞬間を描き出せているかは、断言できないだろう。

高柳の挙げる句は、「冬の空」と「秋の晴」という天文の季語をもって詠まれており、どちらの句も、堆積されて来た句による季語のコード、或いは本意の働きの領分を含んでいることは否定できない。「冬の空」も「秋の晴」も、季語としての「歴史的連想」を通して、空を風景として「見ているわれ」が書かれているにすぎないのではないだろうか。

仁平と高柳の検討から、虚子の方法として積極的に指摘できることは、「歴史的連想」が一句のディテールに普遍性を与えるということである。これが、虚子の企図した「近代季語の枠組み」と分かちがたく膠着している虚子の季語に対する方法と言える。

三章　「近代季語の枠組み」から外された「震災忌」

ここまで、西村の考察する「近代季語の枠組み」と分かちがたく膠着している虚子の俳句の方法について論述してきた。本章では、西村の研究が提示した「近代季語の枠組み」を受けて、虚子がなぜ「震災忌」を「近代季語の枠組み」の外側に置いたのかを考察する。そのために、関東大震災以降の歳時記にあげられる例句から「震災忌」が如何に表象されて来たのかを検討する。そうすることで、「近代季語の枠組み」の論理に該当しなかった理由を明確にし、虚子の関東大震災へ対する表象不可能性と「震災忌」との距離感を検討したい。

三章一節　関東大震災以降の歳時記

以下は、先行研究を基礎としながら、そこに含まれていなかったものを筆者自身で補足した関東大震災前後の歳時記のリストである。歳時記における例句の考察を方法とするため、例句の記載のない季寄せに関しては、対象のリストに掲載はせず、副次的資料として扱うこととした。関東大震災以降、何年までの歳時記を対象とするかについては、先行研究において述べられる「近代季語の枠組み」を踏襲し、虚子編『新歳時記』の増訂版が出版される一九五一年までを射程とした。「震災忌」及びその関連の季語が記載された歳時記には○を付した。

一九〇三年（明三十六）―寒川鼠骨編『歳時記例句選』（上・下）内外出版協会
一九〇四年　―　〃　『俳句新歳時記』大学館
一九〇九年　―中谷無涯編『新脩歳時記』俳書堂
一九一四年（大二）―籾山梓月編『新撰袖珍俳句季寄せ』籾山書店
一九一六年　―今井柏浦編『増補版新撰歳時記』博文館
一九一八年　―長谷川零余子編『袖珍俳句歳時記』春水社
一九一九年　―長谷川諧三編『俳句歳時記』春水社

一九二三年九月　関東大震災

一九二五年（大十五）―高木蒼梧編『大正新修歳時記』資文堂
○一九二六年（昭一）―今井柏浦編『詳解例句纂修歳時記』修省堂
○一九二七年　―　〃　『昭和一万句』修省堂
―宮田戊子編『大成歳時記』星文閣
一九二八年　―　〃　『昭和大成新修歳時記』弘文社
○一九三〇年　―小泉迂外編『最新俳句歳時記』平凡社

○一九三三年　―高浜虚子他編『俳諧歳時記』改造社
一九三四年　―高浜虚子編『新歳時記』三省堂
―小島伊豆海編『新修俳諧歳時記』前田書店
―袖岳楼卉洲編『俳諧歳時記』成光館書店
一九三八年　―小島伊豆海編『俳諧歳時記：新修』洛東書院
一九四〇年　―高浜虚子編『新歳時記　改訂』三省堂
一九四二年　―宮田戊子編『詳解歳時記』大文館書店
一九四四年　―　〃　『歳時記例句集』フタバ書院成光館
一九四七年　―高浜虚子他編『俳諧歳時記』改造社
―宮田戊子編『新修歳時記』大文館書店
一九四八年　―大谷句仏他編『俳諧歳時記』改造社
一九四九年　―青柳菁々編『俳句歳時記』増進堂
○一九五〇年　―新潮社編『俳諧歳時記』新潮社
一九五一年　―高浜虚子編『新歳時記　増訂』三省堂
―水原秋桜子編『新編歳時記』大泉書店

関東大震災以前の歳時記には、「祭」や「盂蘭盆会」、「施餓鬼」などの行事として、多くの死を弔う季語はあるものの、歴史的事象における多くの死を「忌」を冠して弔う季語は見受けられなかった。

小泉迂外編『最新俳句歳時記』には、「震災忌」と併せて、一五七二年の「サン・バルテルミの大虐殺」を指す「虐殺日」が「虐殺日各いのりあげにけり」という例句とともに掲載されている。他の歳時記においては、「虐殺日」の掲載は見受けられず、小泉の裁量によって採用された季語に思われる。同書の序文は、虚子が書いているが、その中で「迂外君は其例句が無い新題は友人に新しく作つて貰つたとのことである。さういふ句にいゝ句は稀なものであつて、其新題の権威を価値づけるには不十分であろうが、其等は追つて出づるところの佳句によつて補へばよい。新題は佳句があつてはじめて存立する。といふことを信条としてゐる私にあつては、其新題に早く佳句の出で来らんことを待

つものである[四四]」と、同書における例句の事情と季語の承認を巡る言説を提示している。

今井柏浦編『詳解例句纂修歳時記』は、関東大震災後三年の月日を経て出版されたが、既に「震災忌」の例句が掲載されている。翌年に出版された同様の編者によるアンソロジー『昭和一万句』にも同様に例句が掲載され、「震災忌」は、年を経て詠まれ出したのではなく、早い段階で詠まれ始めたことが分かる。

「震災忌」という首題に対して、「震災忌」、「震災日」、「震災追悼會」、「震災記念日」といった傍題の違いが見られる。柏浦編の『詳解例句纂修歳時記』は、傍題を挙げず「震災忌」のみを記している。迂外編の『最新俳句歳時記』は、「震災追悼會」を首題とし、「震災忌」を傍題としているが、例句に「震災追悼會」を用いた句は見られない。高浜虚子他編の『俳諧歳時記』においても、「震災記念日」が首題とされ、「震災忌」は傍題扱いとなっている。新潮社編の『俳諧歳時記』では、「震災忌」が首題として挙げられ、「震災記念日」が傍題となっている。以上、掲載のある歳時記では、「震災忌」、「震災日」の例句はあるものの、「震災追悼會」、「震災記念日」はみられず、字数の点で用い辛かったのではないかと推察される。

辞書的な意味において、「忌」は「死者の命日」であって、「日」は「ある特定の一日」を指すので、前者は死者への意識があり、後者は関東大震災という出来事に対する意識があると言えよう。表象において、「忌」を用いるか「日」を用いるかという違いは、次節の例句の分析で検討したい。

四四　高浜虚子「序」『最新俳句歳時記』平凡社、一九三〇年、二頁。

三章二節　「震災忌」は如何に詠まれたか

本節では、「震災忌」が如何に表象されたのかを検討していく。その前に、西村の「震災忌」に対する考察を引用しておいたい。

新題を積極的に採り入れ、実際に客観写生して詠むように推進し、誌友に被災者も多く、千載一遇で体験したことでも、震災は俳句で詠む対象ではないと極めて冷淡に扱った。ここには虚子の俳句観がはっきり示されている。つまり俳句は自然の詩趣を詠むものであって、現実にもがく人間を描くものではないと。そして、かかる場合は写生文こそ威力を発揮するとして、11月号で数編の震災体験記を載せているが、句は全く載せていない。子を背負い火で顔が熱くなるような中を逃げた秋桜子でさえ一句も出詠していない。この4年後の昭和2年には花鳥諷咏を唱え、詠む対象は花鳥諷咏、詠み方は客観写生と俳句を定義した。俳句は遊芸であり極楽の文学なのである[四五]

改訂、増訂を含めて三度出版されている虚子の編集した『新歳時記』（三省堂、一九三四年）には、「震災忌」は一度も掲載されなかた。西村の考察は、虚子の言説によって打ち切られてしまっているが、先行研究や虚子が自ら言うところの季語の本意やコードを「震災忌」は獲得していたのだろうか。本節では、このような西村の考察の先を検討したい。

関東大震災以降、比較的早い段階で出版されたものに、柏浦編『詳解例句纂修歳時記』（修省堂、一九二六年）、同じく柏浦編『昭和一万句』（修省堂、一九二七年）、迂外編『最新俳句歳時記』（平凡社、一九三〇年）がある。前述した通り、「震災忌」は時間を経て作られた季語ではなく、震災後、早い段階から詠まれていたことが推察できる。また、こうした三冊の例句を全て並べてみたところ、例句は次の様に分類出来た。

A

黙禱に響く午砲や震災忌　　泉園[四六]

四五　前掲、『「正月」のない歳時記―虚子の作った近代季語の枠組み』、三一四頁。

四六　今井柏浦編『詳解例句纂修歳時記』修省堂、一九二六年、「震災忌」の項。

目つぶりて稍〃黙禱や震災日　冬草[四七]
目つぶりて稍々黙禱や震災日　冬草[四八]

B

一つ心によろこび泣きぬ震災忌　龍男[四九]
秋風に我生きてあり震災忌　匏生[五〇]

C

震災忌安し萩見て坐りゐる　零余子[五一]
川幅に供養の花や震災忌　桃陽[五二]

Aが追悼の日としての黙禱、Bが被災の心情、Cが花を用いた叙景である。比較的早い段階において、掲載のあったすべての句が分類出来たことから、「震災忌」はすでに取り合わせにおける季語のコード、或いは本意としての働きが読み取れる。「歴史的連想」のレベルまで練り上げられているわけではないが、本意やコードとしての働きが既に見られることは特筆しておきたい。

次に、虚子も編集に携わった『俳諧歳時記』（改造社、一九三三年）の例句を検討する。

九月一日朝顔と人の忌日かな　野船
方丈記にもまして鷹風でありにけり　青々

四七　今井柏浦編『昭和一万句』修省堂、一九二七年、「震災忌」の項。
四八　前掲、『最新俳句歳時記』、「震災追悼會」の項。
四九　前掲、『昭和一万句』、「震災忌」の項。
五〇　前掲、『昭和一万句』、「震災忌」の項。
五一　前掲、『昭和一万句』、「震災忌」の項。
五二　前掲、『最新俳句歳時記』、「震災追悼會」の項。

過ぎし日の慰め難き人あらん　　青々[五三]

前述した柏浦、迂外の歳時記における例句とは違い、「震災忌」を季語として詠みこんだ句は一切掲載していない。あくまで「震災忌」を季語としては使わず、「震災記念日」などの前書きを付すことでわかるようにされている。また「九月一日」、「鷹風」といった季語を用いた句、季語を用いなかった句を掲載している。

このような例句の中で、「方丈記にもまして鷹風でありにけり」に関しては、「歴史的連想」が過分に表象されていることが見てとれる。句中に見られる「方丈記」に関しては、鴨長明が地震について途方もない無常観を記述しているし、「鷹」に関しては、歌人で民俗学者でもある折口信夫が、死者の霊魂を可視化した表象として検討している。どちらにおいても、「歴史的連想」を持つ関東大震災に対する詠みぶりである[五四]。

改造社版の『俳諧歳時記』以降、しばらく「震災忌」やその傍題を掲載する歳時記は見られない。新潮社編『俳諧歳時記』（新潮社、一九五〇年）は、関東大震災から二十七年の月日を経て刊行される。例句を検討する。

萬巻の書のひそかなり震災忌　　中村草田男
大川に映る西日や震災忌　　大橋竹芝
かまくらの月のひかりや震災忌　　久保田万太郎[五五]

草田男の「萬巻の書のひそかなり震災忌」は、角川学芸出版 編『第四版 合本俳句歳時記』（二〇一一年）などの現代の歳時記においても、例句として掲載されている。竹芝の句は、「川幅に供養の花や震災忌　桃陽[五六]」と同じく、川を叙景した句になっている。いずれの句も風景を「写生」している句であることを念頭に置いておきたい。

五三　高浜虚子他編『俳諧歳時記』改造社、一九三三年、三四三頁。
五四　前掲、『弔いの文化史　日本人の鎮魂の形』、一〇―三七頁。
五五　新潮社編『俳諧歳時記』新潮社、一九五〇年、一〇四頁。
五六　前掲、『最新俳句歳時記』、「震災追悼會」の項。

竹芝の句である「川幅に供養の花や震災忌　桃陽」には、柏浦や迂外の例句に見られた季語の本意やコード的働きが見られたが、他の句はどうか。もう少し検討を行いたい。草田男の「萬巻の書のひそかなり震災忌」について、「ひそかなり」は「私物化する」と「表立たず、内密なさま。こっそり」の意があるが、「萬巻」の量と「書の」の主格を表す「の」から考察するに、後者の意であって、大型の図書館の閉架やあまり人の来ない書架を想像するのが妥当であろう。

関東大震災においては、多くの犠牲者が出たり、建物が崩壊したりする損失もあったが、一方、学術的な損失も甚大であった。その代表的なものとして、本郷にある東京帝国大学図書館の消失をあげることが出来る。野上弥生子は、「燃える過去」という随筆で、バーナード・ショーの『シーザーとクレオパトラ』の一節であるエジプトのアレキサンドリア図書館の家事に際するシーザーとシオドタスの会話を彷彿としながら、その様子を記している。また、学者である柳田国男や金田一京介は、関東大震災が自らの研究に大きな打撃を受けたことを記している[五七]。草田男の句の「ひそかなり」が、前述した校舎の、多くの本が表立たずわれわれの前から姿を消したと読む場合であれば、文芸誌『白樺』や『解放』などの震災に際して廃刊を迫られた雑誌を考えることも出来るだろう。

万太郎の句である「かまくらの月のひかりや震災忌」においては、震源が相模湾北部であったことを思えば、相模湾に面した鎌倉の被害の甚大さを想像できる仕掛けになっている。関東大震災の夜の月に関して、虚子が次のような記述を残している。

> 大地が一度に揺れると人間は右往左往し混乱し、圧死し、避難する。箒の先に掃き壊された蟻蛭の中からありがあはてふためき逃れる状態と目下避難民の状態と何の異なるところがあらう。～（略）～あの殺風景な大破壊、少しも興味のない、どこをどう考へても俳句にはなりさうもなかつた。が併し其地震の大地に芙蓉の花が咲いてをり、葉鶏頭の赤らみそめてをるといふことには興味があつた。又地震そのものの興味ではない[五八]

虚子はこのように、万太郎の句に先んじて、被災の夜の月を「地震そのものの興味ではない」として唾棄していた。虚子の地震へ対する表象不可能性は、万太郎の句に見られる震災の夜の月の興味を「地震そのもの」と区別されるものであるとし、「地震そのもの」をどう詠むかという問題であったと見ることが出来る。

五七　前掲、『文豪たちの巻頭大震災体験記』、五三―五五頁。
五八　前掲、「消息」『ホトトギス』、七四―七六頁。

いずれの句も、震災から時を経て、文人たちや虚子が述べていた関東大震災の記憶が、句の表象の背景になっていることが明らかである。被災の記憶が、「写生」に対してディテールを与えているが、それは「歴史的連想」によって行われている。改造社版の『俳諧歳時記』からしばらく見られることのなかった「震災忌」が、十七年を経て、柏浦や迂外の場合とは違った文人たちの体験を大きく含む、「歴史的連想」を含んだ例句になっている点で、季語のコード、本意自体が大きな変容を遂げていることが分かる。

次に、こうした十七年の空白の間に詠まれた句、また「震災忌」の句を為すことはなく、また自ら編集した歳時記に季題として残さなかった虚子の選を検討するために、ホトトギスの雑詠欄を参照する。虚子は、『新歳時記』には「震災忌」の項を一度も掲載しなかったが、『ホトトギス雑詠全集』においては項を挙げている。

地下室に木魚の音や震災忌　昭和四　東京　水竹居
震災忌両国橋に凭れけり　昭和五　所沢　春虹
支へたるまゝの古家や震災忌　昭和五　東京　香蘭
上方の言葉に馴れて震災忌　昭和五　須磨　青篁[五九]

アパートに仮の住ひや震災忌　昭和六　海州　矢澤沙村
今はなき友のたよりや震災忌　昭和六　松山　澄月黎明[六〇]

母と呼ぶ伯母に仕へて震災忌　昭和八　福井　持田三位
二三日東京にゐて震災忌　昭和八　大阪　大橋櫻坡子
今はなき記憶の街や震災忌　昭和八　京都　稲田壺青
その日より故山に住みて震災忌　昭和八　京都　稲田壺青
この町に寺なくなりぬ震災忌　昭和八　東京　高橋風外

五九　高浜虚子編『ホトトギス雑詠全集　第八巻』ホトトギス雑詠全集刊行会、一九三二年、八六―八七頁。
六〇　高浜虚子編『続ホトトギス雑詠全集　秋の部』ホトトギス雑詠全集刊行会、一九三三年、一三七頁。

朝鮮に落ちて住み古り震災忌　昭和八　龍岩浦　竹田青江
ふるさとに落着く母や震災忌　昭和九　筑後　江崎傳
詫されし孤は中学へ震災忌　昭和九　大阪　浅井啼魚
移り住むもとの神田や震災忌　昭和九　兒島　平谷破葉[六一]

婢となりて京に住みつき震災忌　昭和十　京都　田畑比古
東京に公園殖えぬ震災忌　昭和十一　東京　大橋五昴
今もなほ長屋住居や震災忌　昭和十一　敦賀　宮川史斗
奉公の姉弟よ震災忌　昭和十二　東京　保田ゆり女
時計はや午すぎてをり震災忌　昭和十二　福岡　雛津夢里[六二]

今もなほ一職工や震災忌　昭和十三　堺　河野ひろみ
両国に川波立てり震災忌　昭和十三　東京　櫻間三輪女
再びの横濱ずまひ震災忌　昭和十三　鶴見　工藤石羊
わびすみて忘れ難しや震災忌　昭和十四　東京　池谷清流
焼跡にまた住みふりて震災忌　昭和十四　東京　中村辰之丞
墨水にいつもの潮や震災忌　昭和十四　□中　駒ヶ嶺不蘆
惣太郎生きてはゐずや震災忌　昭和十五　福岡　田中けいじ
たしかなる盲の記憶震災忌　昭和十五　東村山　平松百合男
震災忌時計は時を刻みをり　昭和十五　福岡　田中けいじ
衰へてゆく人々や震災忌　昭和十五　東京　京極杞陽

六一　高浜虚子編『第三ホトトギス雑詠全集　秋の部』ホトトギス雑詠全集刊行会、一九三五年、一九九―二〇〇頁。
六二　高浜虚子編『新選ホトトギス雑詠全集　第五巻』中央出版協会、一九四一年、三〇七頁。

震災忌月に問ふべき事のあり　　昭和十五　福岡　　田中けいじ
震災忌難をのがれし父母とあり　　昭和十五　城大□科　井上恒村[六三]

例句において、「震災日」の用例はなく「震災忌」のみとなっている。前述した歳時記にみられた「川幅に供養の花や震災忌　桃陽」、「大川に映る西日や震災忌　大橋竹芝」に対して、雑詠選集掲載の「両国に川波立てり震災忌　櫻間三輪女」は、季語の本意に沿った句になっていることがわかる。「震災忌両国橋に凭れけり　春虹」は、「両国橋」を用いることで「川」を連想させており、その点で副次的に、前述してきた「震災忌」の本意を用いている。「両国橋」に関しては、関東大震災によって大きな損傷をうけなかった橋であるが、カント大震災後の復興のプロジェクトとして隅田川十大橋梁を下町の新名所と試みがあった。そのため、震災後に新しく架設されている[六四]。震災後の復興による新しい「風景」としての着眼が見て取れる。また、初期の歳時記に見られた「黙禱に響く午砲や震災忌　泉園」の黙禱の句に対して、雑詠欄掲載の「時計はや午すぎてをり震災忌　雛津夢里」は、黙禱を行うべき正午を過ぎていたとして詠み、これも副次的に本意を用いている。

このように、柏浦、迂外編の歳時記に掲載された例句における季語の本意を含む句がホトトギス雑詠欄にも見られる。

では、こうした句の他ホトトギス雑詠欄にて取り上げられた句は、どのようなものであったか。それらを並べたところ、次のような分類が可能であった。

「上方の言葉に馴れて震災忌　青篁」、「アパートに仮の住ひや震災忌　矢澤沙村」、「その日より故山に住みて震災忌　稲田壺青」、「朝鮮に落ちて住み古り震災忌　竹田青江」、「ふるさとに落着く母や震災忌　江崎傳」、「移り住むもとの神田や震災忌　谷破葉」、「今もなほ長屋住居や震災忌　宮川史斗」、「再びの横濱ずまひ震災忌　工藤石羊」、「わびすみて忘れ難しや震災忌　池谷清流」、「焼跡にまた住みふりて震災忌　中村辰之丞」といった関東大震災後を生きた定住先の句。

「母と呼ぶ伯母に仕へて震災忌　持田三位」、「詫されし孤は中学へ震災忌　浅井啼魚」、「奉公の姉弟よ震災忌　保田ゆり女」、「震災忌難をのがれし父母とあり　井上恒村」の関東大震災後を生きた家族関係の句。「婢となりて京に住みつき震災忌　田畑比古」、「今もなほ一職工や震災忌　河野ひろみ」、「奉公の姉弟よ震災忌　保田ゆり女」の関東大震災以後を生きた職業の句。「今はなき記憶の街や震災忌　稲田壺青」、

六三　高浜虚子編『新選ホトトギス雑詠全集　第六巻』中央出版協会、一九四一年、三二四―三二五頁。
六四　関東相震災９０周年記念行事実行委員会編『関東大震災記憶の継承　歴史・地域・運動から現在を問う』日本経済評論社、二〇一四年、六二頁。

「この町に寺なくなりぬ震災忌　高橋風外」、「東京に公園殖えぬ震災忌　大橋五昴」の関東大震災以後の町の様子の句、の三つである。いずれも関東大震災以後を生き延び、そして現在の生活を詠んでいる句である。「日」ではなく、「忌」という、年に一度巡ってくる「死者の命日」に、関東大震災以後を生き延び、現在の生活を詠むという季語という側面が、雑詠欄の虚子の選では中心的であった。ただ、それは本意やコード、「歴史的連想」という季語の創造力とは違った可変的な季語のあり方であった。

三章三節　虚子は「近代季語の枠組み」から何を外したか

虚子が「近代季語の枠組み」から何を外したか検討するために、今一度、西村の「震災忌」へ対する考察を引用する。

新題を積極的に採り入れ、実際に客観写生して詠むように推進し、誌友に被災者も多く、千載一遇で体験したことでも、震災は俳句で詠む対象ではないと極めて冷淡に扱った。ここには虚子の俳句観がはっきり示されている。つまり俳句は自然の詩趣を詠むものであって、現実にもがく人間を描くものではないと。そして、かかる場合は写生文こそ威力を発揮するとして、11月号で数編の震災体験記を載せているが、句は全く載せていない。子を背負い火で顔が熱くなるような中を逃げた秋桜子でさえ一句も出詠していない。この4年後の昭和2年には花鳥諷咏を唱え、詠む対象は花鳥諷咏、詠み方は客観写生と俳句を定義した。俳句は遊芸であり極楽の文学なのである。[六五]

虚子の編集した『新歳時記』において、「震災忌」は一度も掲載されることは無く「近代季語の枠組み」から外される形となっている。前節の検討において、西村の考察する「ここには虚子の俳句観がはっきり示されている。つまり俳句は自然の詩趣を詠むものであって、現実にもがく人間を描くものではないと。」が指摘する通り、虚子の関東大震災に対する表象の考え方は、虚子が自ら体験し、万太郎が詠んだ「歴史的連想」ではなく、あくまで「地震そのもの」にあった。

ただ、前節の検討において、西村の「ここには虚子の俳句観がはっきり示されている。つまり俳句は自然の詩趣を詠むものであって、現実にもがく人間を描くものではないと。」という指摘とは、或いは真逆の形で「震災忌」が虚子によって捉えられていたのも事実であろう。「忌」という年に一度巡ってくる「死者の命日」に、関東大震災以後を生き延び、現在の生活を詠む句が、雑詠欄において多く虚子の選句を得ていた。虚子は、忌を詠むことに関しては禁じていなかったのであった。

万太郎の句の「かまくらの月のひかりや震災忌」は、まさしく仁平が指摘した虚子の方法と同様の方法であった。鎌倉の月の光がみえるのは、「震災忌」である九月一日に限ったことではないが、しかしそこに「震災忌」という季語を配することによって、きっと関東大震災の夜も、同じように月のひかりに照らされ情緒を感じただろうという「空想」が成立するからだ。その「空想」が、一句のディテールに普遍性を

六五　前掲、『「正月」のない歳時記―虚子の作った近代季語の枠組み』、二〇〇九年、三一四頁。

付与している。ただ、虚子は、こうした万太郎の句の表象を「地震そのもの」の興味ではないと対象から外しており、「空想」がディテールに普遍性を与える方法は、「地震そのもの」を詠むということと真逆になることを既に考えている。

対して、「忌」という年に一度巡ってくる「死者の命日」に、関東大震災以後を生き延び、現在の生活を詠むという行為は、虚子にとって、雑詠欄のあり方で許容しているのであった。このような許容の在り方を「自己の感受性を絶対化しようとはしないリアリズムであり、他者を許容するリアリズムであった。これをあえて凡俗にとどまるとするリアリズムといってもよい[六六]」として、江藤淳が指摘した虚子のリアリズムの在り方を思い出してもよい。

虚子が何度も述べる「殺風景」という言葉は、まさしく「歴史的連想」を内包する「風景」が震災において「地震そのもの」ではない空虚なイメージとなってしまったことを提示している。それはさらに虚子の方法において、表象不可能なものである震災が、リアリズムにかかわる問題として捉えらていることを明らかにしている。

「震災忌」は、柏浦や迂外が編集した早い段階で「震災忌」を掲載した歳時記において、既にコードや本意の働きを獲得していた。新潮社版の『俳諧歳時記』においては、時を経て、文人たちや虚子の体験した「歴史的連想」へと変遷を遂げていた。こうした変遷の途中で、虚子は雑詠欄において、柏浦や迂外の歳時記の本意を選句で選んでいたし、自ら述べた来たるべき「歴史的連想」を詠むこともできただろう。つまり、「震災忌」は季語としてのコードや本意の働きをもっており、虚子の方法によって詠むことは可能であった。その点において、虚子の方法と分かつことが出来ない「近代季語の枠組み」の条件を果たしているのである。虚子が「近代季語の枠組み」から外したものは、自らの体験と関連した表象不可能性としての「地震そのもの」とは全く違う形となってしまう「歴史的連想」であった。「地震そのもの」はあくまで「殺風景」なものであり、「歴史的連想」の外側にあると考えていたのであった。

この地点において「近代季語の枠組み」は、大いなる矛盾を孕むこととなる。「近代季語の枠組み」とは、謂わば巨大な「歴史的連想」の体系である。「近代季語の枠組み」の論理となっている「歴史的連想」を詠うことができる「震災忌」を「地震そのもの」ではないとする虚子の付言は、その体系自体が「そのものでないこと」を肯定できなくなってしまうのである。「近代季語の枠組み」自体が、リアリズムの側から「そのものでない」体系となってしまうことを、「震災忌」を「近代季語の枠組み」の外側に置くことは意味するのである。

六六　前掲、『リアリズムの源流』、四二頁。

三章四節　詠むことで弔うこと

では、虚子が、「地震そのもの」ではないとして「近代季語の枠組み」の外側においた「震災忌」であったが、ホトトギス雑詠欄においては許容されていた。では、虚子がホトトギス雑詠欄において許容した関東大震災以後を生き延び、現在の生活を詠む行為とは何なのか、「忌」の所作とはどのようなものかを本節では検討する。そうすることで、「震災忌」を「近代季語の枠組み」から外し、「歴史的連想」を打ち捨てた虚子に迫りたい。そして、後に産出される「忌」の在り方について検討する手がかりとしたい。

「忌」とは、「死者の命日」の意味であった。「震災忌」以前においては、専ら「子規忌」や「芭蕉忌」などの著名な古人の命日を指す季語としてあった。古人に対する忌日の季語は、虚子編の『新歳時記』にも掲載が見られ、『新歳時記』より更に精選された虚子編の『季寄せ』においても「芭蕉忌」、「蕪村忌」、「近松忌」、「西鶴忌」、「鳴雪忌」、「子規忌」を掲載している。いずれも、俳諧史、俳句史において重要度の高い、「歴史的連想」に耐え得るであろう古人が収載されている。

川村邦光は、「とむらふ」の二つの意味として「訪ふ（とむら）」と「弔ふ（とむら）」とがあり、それらが、語源において同様の意味を持つことを指摘しながら、芭蕉の旅にその二つの営みがあるとする。また、芭蕉の旅は、古人への弔いであったことを述べる。

> 亡き人を訪ねて、菩提を願うのが弔いである。もっと幅広く言うのなら、亡き人の縁を想い起こして、何らかの形で継承していくのも弔いとなろう。芭蕉の奥羽への旅は、自らが霊に取り憑かれて風狂の旅人となり、西行をはじめとする古人たちの旧跡を訪れて、弔う旅であった。〜（略）〜
>
> このように、歌枕の名所旧跡は廃墟となっていたばかりでなく、実在もしなかったし、実際のところは想像の所産であった。それでもなお芭蕉が涙したのは、古代の歌の世界との訣別、いわば古代の弔いであった[六七]

まさしく「詠む」ことで「弔う」ことを行っていたのは、俳諧の祖たる芭蕉であった。「詠む」ことで特定の古人を「弔う」在り方は、「忌」の在り方の規定になっていると言えるだろう。川村が、芭蕉の旅を「弔い」として位置づけることの論理は、次のような「弔い」における場

六七　前掲、『弔いの文化史　日本人の鎮魂の形』、iii—iv頁。

のあり方を背景としている。

弔いの場での三者の関係性の環は、死者と喪主 遺族が弔問者を歓送することによって閉じられる。ところが、かつての弔問者であれ、喪主・遺族であれ、死者を想起するなら、死者の記憶や面影、あるいはその霊が立ち現れて、弔いの場が再現されることになるだろう。生者の弔い／訪いによって、死者はいわば〝生きた死者〟として再び現れて生きつづける。循環する弔いの場があらためて構築される、あるいは更新されていくということができるだろう。

弔いの場の再構築・更新は、生者―すでに弔問者でも喪主・遺族でもなく、ある意味ではすべて遺族である生者―による死者(死霊)の想起と記憶によって可能となる。この想起と記憶が死者を歓待する契機となる。そして、それはまた死者への贈与ともなるだろう。死者への思い・記憶はなににも増して、死者に対する手向けとなるだろう。それがなければ、死者は消え失せてしまうことになる。

この想起・記憶と歓待・贈与も、以前とは異なっているだろう。死者への思い・記憶はたえず新たにされる、あるいは再編されるのである。死者の記憶もしくは遺産がふるいにかけられて選り分けられる。それは、反復して繰り返され、そして新たに再構成された記憶がとどめられていくことになる。死者の語り、もしくは物語がなされるかもしれないし、またモニュメントが建立されるかもしれない。それは、生者、かつての弔問者や喪主・遺族による、死者に対する歓待と贈与となるだろう。

この弔いの場では、生者が死者の弔い／訪いによって、死者を客人として迎える主人となる。この主人の歓待と贈与はただ想起と記憶だけに依拠する。死者という存在、またその存続は、想起と記憶を頼りとするほかになく、はかなく、か細く脆い存在である。

このような存在のそばにひたすらたたずみ、自分をとりあえず留保して、耳を澄まして、声にならないような声をひたすら聴こうとするところから、死者が想起され、死者の記憶が紡ぎ出されてくるだろう。あるいは、死者が夢枕に立ったり、死霊／霊として現れたりして、切々と問わず語りをする、と比喩的にいうこともできる[六八]

また、このような「弔いの場」は、「身元も身分も貧富も民族も問わず、誰であっても〝来る者は拒まず〟〝去る者は追わず〟といったように、限りなく開かれている[六九]」という。古人の「忌」を詠むということは、誰もが古人を想起し、記憶し、死者を歓待し、それがそのまま

六八 川村邦光『弔い論』青弓社、二〇一三年、二十三―二十四頁。
六九 前掲、『弔い論』、二十一頁。

死者への贈与となるのである。このような「弔い」の契機として、「忌」が用意されていることを念頭に置いておきたい。

では、「芭蕉忌」や「子規忌」などの古人を悼む忌日の季語ではない、歴史的事象における多くの死を弔う「震災忌」の場合はどうか。関東大震災から改造社版の『俳諧歳時記』に至るまでの柏浦、迂外編の歳時記の例句を、今一度引用したい。

A

黙禱に響く午砲や震災忌　泉園
目つぶりて稍〃黙禱や震災日　冬草
目つぶりて稍々黙禱や震災日　冬草

B

一つ心によろこび泣きぬ震災忌　龍男
秋風に我生きてあり震災忌　匏生

C

震災忌安し萩見て坐りゐる　零余子
川幅に供養の花や震災忌　桃陽

「震災忌」の当初の例句は、「黙禱」や「供養」を通して死者を詠み、自らが生きていることの喜びや安堵の実感を詠むことで、逆に死や死者を連想させるものであった。だから、そこには本意やコードとしての分類は可能だが、時を経て獲得された虚子の季語の方法の中核をなす「歴史的連想」は用いられていない。「震災忌」に向けて書かれているのである。

「震災忌」に向けて書かれているということがどういうことなのか、具体的に作品を読むことにする。「黙禱に響く午砲や震災忌」は、きっと関東大震災の夜も、同じように響く午砲を聞きながら黙禱していただろうという「空想」が成立しない。その「空想」が断念されていることで、ディテールに普遍性を与えることはできない。「目つぶりて稍々黙禱や震災日」や「川幅に供養の花や震災忌」に関しても同じこと

が言える。「震災忌」という季語から普遍性を取り出すのではなく、「震災忌」に向けて詠まれているのである。「一つ心によろこび泣きぬ震災忌」、「秋風に我生きてあり震災忌」、「震災忌安し萩見て坐りゐる」に関しては、「震災忌」に対する生の喜びや安堵の実感が述べられているだけであって「歴史的連想」から「空想」を行う余地がない。そこには「写生」も無ければ「歴史的連想」もないのである。次のような、慰霊のために、限りなく個人的な死者の歓待のために開かれていた。

確かに生者は死者を迎え入れて背中に乗らせ、歓待している。死者を想起し、記憶して、その生と死の証しを語り継ぎ、志を継いでいこうとしている。さらに、この語り手は死者をいわば異次元へと飛躍させているのだ。なによりも、死者が主体となっている。死者が展開する闘いへと生者を招いて、死者自身の弔いの闘いに連繋させ歓待する。弔いは死者が自らおこなうのだ。それがまた、死者だけでなく、生者の生きる作法となる。死者が生者を歓待し道連れにして、未来へと向けた闘いに誘うのである。死者が生者を、また生者の生を悼み慰めている、弔っているということもできるだろう[七〇]

このような死者と正者の相互の関係のように、「震災忌」の句は、「生」を或いは「死」を詠むことで、「死」を或いは「生」を深く表象している。「震災忌」の初期の表象において、「忌」を詠むことは「生」と「死」を詠むことであり、「弔う」ことであった。

虚子が雑詠欄で取り上げた句は、こうした「弔い」の在り方と様相をやや異にしている。関東大震災後を生きて詠んだ定住先の句、家族関係の句、町の様子の句が詠まれた「震災忌」は、そのいずれもが「弔い」というより「喪」と呼ぶものに近い。

喪が〈仕事〉と称されていることは、さしあたりは奇妙なことである。喪に服することは、死者や他界を思うことであるから、それはもっとも非世俗的な営みだと思われるからだ。しかし少し考えてみると、喪が〈仕事〉と称されるのは当然だと思われてくる。国王の旅が公務と称されても、芸能が仕事と称されても不思議ではないのと同じことである。私は、喪の仕事と弔いを区別しておきたい。

誰かがいなくなると、必ず誰かが得をして誰かが損をする。この得失は、経済的得失や身分的得失にかぎらない。喜びの感情、精神的解放感、時間的空間的余裕などは利得であるし、悲しみの感情、精神的喪失感、寂寞とした時間空間などは損失である。これらは、誰かが社会的に存在しなくなることがもたらす社会的得失である。このレベルにおいては、失踪と死亡は大差がない。誰かがいなくなること

七〇 前掲、『弔い論』、四十二―四十三頁。

は、誰かが社会的諸関係から脱落して消え失せることに等しいからである。

ところで、誰かが死ぬことは、誰かが社会的に存在しなくなることでもある。誰かが死ぬことは、誰かと誰かの社会的諸関係がなくなってしまうことでもある。そのために、誰かが死ぬと、必ず誰かが得をして誰かが損をするようになっている。しかし、誰かが死んだからといって、誰かが〈生きる〉上で得をしたり損をしたりするわけではない。あくまで誰かが〈生活する〉上で得をしたり損をしたりするだけである。誰かの死と誰かの生は断絶しているが、誰かの死と誰かの生活は断絶しているどころではない。だから誰かが死ぬと、その「死」を望まなかった人以外に、その「死」を潜在的に願望していた人が社会には必ず存在していることになる。そのように社会はできあがっている。ここには何の罪も何の無意識もない。いたって平明な事実があるだけだ[七一]

小林は、以上のように「喪」を位置づける。虚子が選の中で多く取り立てた「震災忌」の句は、まさしく社会的な「喪」の作業に近い句であった。「震災忌」の初期の段階における表象は、あくまで、「弔い」や「喪」といった個人的なものに外ならなかったのである。その点において、「盂蘭盆会」や「施餓鬼」の不特定多数の餓鬼を祀るものではいけないのである。

小林は、多くの死を「弔う」ということについて不可能であると断言している。追悼したり哀悼したりすることは可能であれ、多くの死を弔うことは不可能であり、死者ひとりひとりの名によって指し示すことでしか弔うことはできないと述べる[七二]。当初の「震災忌」における表象は、勿論個人の名前を記してはいないが、それはあくまで詠む行為においては、「弔い」になり得るだろう。「震災忌」以来、産出される「忌」は、現在において、多くの死の度に産出される。このような在り方は、「震災忌」の当初の表象とは、別の意味をもつものとして考察していかねばならない。

七一 小泉義之『弔いの哲学』河出書房新社、一九九七年、三十二―三十三頁。

七二 前掲、『弔いの哲学』、四十一―四十二頁。

おわりに

「震災忌」の成立と表象を、関東大震災以降の歳時記の変遷を辿りながら、考察してきた。「震災忌」は、そのコードとしての働きや本意が、常に確定しているものではなく、それ自体変遷を遂げていた。それは、震災から時を経て刊行された新潮社版の『俳諧歳時記』においては、文人たちや虚子自身の「歴史的連想」を得るものとなっていた。「歴史的連想」が付与された「震災忌」は、虚子の方法と膠着した「近代季語の枠組み」の論理においては、その内側に採り入れられても構わないものであったはずだが、虚子は「震災忌」を自らの歳時記に一度も収載することがなかった。

それはなぜか。それは、虚子が自らの体験をもって、先んじて「震災忌」の「歴史的連想」を「地震そのもの」ではないものとして唾棄したためである。関東大震災の夜における、自らの月に対する興味のあり方を、虚子は表象不可能性の体験において、棄却したのであった。「震災忌」はこうして「近代季語の枠組み」の外側に位置づけられることとなった。

ただ、この位置付けにより、「近代季語の枠組み」は大いなる矛盾を孕むこととなった。巨大な「歴史的連想」の体系で「近代季語の枠組み」は、そのものでないこと」を肯定できなくなってしまった。「近代季語の枠組み」自体が、リアリズムの側から「そのものでない」体系となってしまうのである。

では、「震災忌」は、「近代季語の枠組み」の外側で、表象不可能性を孕みながら、どのように虚子によって企図されたか。それは、柏浦、迂外編の歳時記に見られるような「震災忌」の初期の表象、或いは、ホトトギス雑詠欄において、関東大震災以降を生きるものが、「詠む」ことを通して、「弔い」や「喪」を行うべき季語として試みられていた。「詠む」ことによって、故人を想起し、記憶し、死者を歓待し、それがそのまま死者への贈与となるような、「弔いの場」を出現させる契機として「忌」が試みられていた。関東大震災以降、産出されてきた多くの死を弔う季語において、それは試みられてきたが、その始源における試みは、あくまで個人的な「詠む」行為にすぎなかった。

さて、「近代季語の枠組み」は、虚子の方法によって超克できない表象不可能なものを、外側に置いてきたが、現在まで「敗戦忌」、「広島忌」、「長崎忌」、「沖縄忌」は系譜として産出されている。「震災忌」がそうであったように、こうした忌日季語も「詠む」ことを通して、「弔い」や「喪」を行う季語として試みられて来たのだろうか。

今後の研究における課題として、「震災忌」以降、系譜として産出された忌日季語の考察を、それぞれ試みたい。その試みの始まりとして、次のような「沖縄忌」或いは「慰霊の日」の表象を提示したい。

遺骨なき兄はいづこぞ慰霊の日　　知念弘子[七三]
遺骨無き遺族の嘆き沖縄忌　　赤田雨条[七四]
骨たちが起きはじめたる沖縄忌　　喜納勝代[七五]

「沖縄忌」、及び「慰霊の日」は、沖縄戦終結の日として制定された。戦後、沖縄のいたるところに戦没者の白骨が散乱しており、これらの遺骨を収集し、身元が判別できない場合は墓苑に合祀された。この取り組みは、戦後長らく行われていた[七六]。誰が、どこで、いつ亡くなったのおかわからない戦後の弔いの在り方は、このような表象と密接に関係しているだろう。

慰霊の日書き称えキナクササ便乗する　　浦崎楚郷[七七]

「沖縄忌」は、こうした死者の在り様とは別に、中将牛島満の自刃による日本軍の組織的壊滅となった六月二十三日を指している。もっとも、初めは一九六一年に六月二十二日として制定されたが、その後、一九六五年に六月二十三日に改められたのであった[七八]。楚郷の句からは、そのような弔いの空虚さを読むことが出来るだろう。本研究によって明らかにした系譜的に産出される「忌」の在り方をふまえ、引き続き「忌」の成立と表象を研究していきたいと考える。

七三　瀬底月城『沖縄・奄美南島俳句歳時記』自家製版、一九九五年、「沖縄忌」の項。
七四　野ざらし延男『沖縄俳句総集』自家製版、一九八一年、「赤田雨条」の項。
七五　前掲、『沖縄俳句総集』、「喜納勝代」の項。
七六　前掲、『沖縄大百科事典　上巻』、一六〇頁。
七七　前掲、『沖縄俳句総集』、「浦崎楚郷」の項。
七八　沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典　上巻』沖縄タイムス社、一九八三年、二五五頁。

参考文献

・書籍

安住敦他編『現代俳句大辞典』明治書院、一九八〇年。
あらきみほ『図説・俳句』日東書院、二〇一一年。
石井正己『文豪たちの関東大震災体験記』小学館１０１新書、二〇一三年。
石寒太他編『俳句って何？』邑書林、一九九二年、九七頁。
江藤淳『リアリズムの源流』河出書房新社、一九八九年。
沖縄大百科事典刊行事務局編『沖縄大百科事典　上巻』沖縄タイムス社、一九八三年。
柄谷行人『日本近代文学の起源　原本』講談社文芸文庫、二〇〇九年。
角川『俳句』編集部『高浜虚子の世界』角川学芸出版、二〇〇四年。
川村邦光『弔いの文化史　日本人の鎮魂の形』中公新書、二〇一五年。
川村邦光『弔い論』青弓社、二〇一三年。
関東大震災９０周年記念行事実行委員会編『関東大震災記憶の継承　歴史・地域・運動から現在を問う』日本経済評論社、二〇一四年。
小泉義之『弔いの哲学』河出書房新社、一九九七年。
高木晴子・上野章子・大岡信・川崎展宏「座談会　父・虚子、俳人・虚子を語る」『国文学　解釈と教材の研究』學燈社、一九九一年。
高浜虚子『俳談』岩波文庫、一九九七年。
高浜虚子『定本　高浜虚子全集』全巻、毎日新聞社、一九七四―一九七五年。
高浜虚子編『ホトトギス雑詠全集　第八巻』ホトトギス雑詠全集刊行会、一九三二年。
高浜虚子編『続ホトトギス雑詠全集　秋の部』ホトトギス雑詠全集刊行会、一九三三年。
高浜虚子編『第三ホトトギス雑詠全集　秋の部』ホトトギス雑詠全集刊行会、一九三五年。
高浜虚子編『新選ホトトギス雑詠全集　第五巻』中央出版協会、一九四一年。
高浜虚子編『新選ホトトギス雑詠全集　第六巻』中央出版協会、一九四一年。

筑紫磐井『季語は生きている　―季題・季語の研究と戦略―』実業公報社、二〇一〇七年。
中村光夫『日本の近代小説』岩波新書、一九五四年。
西村睦子『「正月」のない歳時記―虚子の作った近代季語の枠組み』本阿弥書店、二〇〇九年。
仁平勝『虚子の読み方』沖積舎、二〇一〇年。
野ざらし延男『沖縄俳句総集』私家版、一九八一年。
野林正路『詩・川柳・俳句のテクスト分析　語彙を図式で読み解く』和泉書院、二〇一四年。
萩原朔太郎「俳句は抒情詩か？」『四季』四季社、一九三九年九月号。
長谷川櫂『古池に蛙は飛び込んだか』中公文庫、二〇一三年。
ハルオ・シラネ著、衣笠正晃訳『芭蕉の記憶　文化の記憶』角川叢書、二〇〇一年。
深見けん二『虚子編『新歳時記』季題一〇〇話』飯塚書店、二〇一四年。
福井咲久良「高浜虚子編『新歳時記』の三種版」『三田國文』五十号、慶応義塾大学国文学研究室、二〇〇九年十二月。
福井咲久良「高浜虚子編『季寄せ』考：『季寄せ』改版と虚子編『新歳時記』修改訂の関係性」『三田國文』五十一号、慶應義塾大学国文学研究室、二〇一〇年六月。
ブルッカー・ピーター著、有元健・本橋哲也訳『文化理論用語集　カルチュラルスタディーズ＋』新曜社、二〇〇三年。
堀切実「解説」『増補　俳諧歳時記栞草（下）』岩波文庫、二〇〇〇年。
正岡子規「明治二十九年の俳句界」『子規全集 第四巻』講談社、一九七六年。
宮坂静生『季語の誕生』岩波新書、二〇〇九年。

・歳時記（編年）
寒川鼠骨編『歳時記例句選』（上・下）内外出版協会、一九〇三年。
寒川鼠骨編『俳句新歳時記』大学館、一九〇四年。
中谷無涯編『新脩歳時記』俳書堂、一九〇九年。
籾山梓月編『新撰袖珍俳句季寄せ』籾山書店、一九一四年。

今井柏浦編『増補版新撰歳時記』博文館、一九一六年。
長谷川零余子編『袖珍俳句歳時記』春水社、一九一八年。
長谷川諧三編『俳句歳時記』春水社、一九一九年。
高木蒼梧編『大正新修歳時記』資文堂、一九二五年。
今井柏浦編『詳解例句纂修歳時記』修省堂一九二六年
今井柏浦編『昭和一万句』修省堂、一九二七年。
宮田戊子編『大成歳時記』星文閣、一九二七年。
宮田戊子編『昭和大成新修歳時記』弘文社、一九二八年。
小泉迂外編『最新俳句歳時記』平凡社、一九三〇年。
高浜虚子他編『俳諧歳時記』改造社、一九三三年。
高浜虚子編『新歳時記』三省堂、一九三四年。
小島伊豆海編『新修俳諧歳時記』前田書店、一九三四年。
袖岳楼卉洲編『俳諧歳時記』成光館書店、一九三四年。
小島伊豆海編『俳諧歳時記：新修』洛東書院、一九三八年。
高浜虚子編『新歳時記　改訂』三省堂一九四〇年。
宮田戊子編『詳解歳時記』大文館書店一九四二年。
宮田戊子編『歳時記例句集』フタバ書院成光館、一九四四年。
高浜虚子他編『俳諧歳時記』改造社、一九四七年。
宮田戊子編『新修歳時記』大文館書店、一九四八年。
高浜虚子他編『俳諧歳時記』改造社、一九四八年。
青柳菁々編『俳句歳時記』増進堂、一九四九年。
新潮社編『俳諧歳時記』新潮社、一九五〇年。
高浜虚子編『新歳時記　増訂』三省堂、一九五一年。

水原秋桜子編『新編歳時記』大泉書店、一九五一年。
瀬底月城『沖縄・奄美南島俳句歳時記』自家製版、一九九五年。
三省堂編『ホトトギス俳句季題便覧』三省堂、二〇〇一年。
夏井いつき『絶滅寸前季語辞典』東京堂出版、二〇〇一年。
夏井いつき『続・絶滅寸前季語辞典』東京堂出版、二〇〇三年。
学研編『現代俳句歳時記』学研、二〇〇四年。
夏井いつき『絶滅危急季語辞典』ちくま文庫、二〇一一年。
角川学芸出版 編『第四版 合本俳句歳時記』角川学芸出版、二〇一一年。